

Title	中世における本地物の研究(八) : 毘沙門の本地・梵天国
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1984
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.21 (1984.) ,p.45- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	太田次男教授退職記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000021-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世における本地物の研究（八）

—— 毘沙門の本地・梵天国 ——

松 本 隆 信

毘沙門の本地

「毘沙門の本地」の伝本には次の諸本がある。（各本下部の
〈 〉内は本稿で使用する略号）

- ひしやもんの本地（題簽）〔江戸前期〕写 奈良絵本 半
〈慶應甲〉
- 三帖 反町茂雄氏旧蔵（室町時代物語集第二所収）〈反町〉
○ 千歳王物語（後題簽）中欠 〔江戸前期〕写 奈良絵本 横
二冊 早稲田大学図書館蔵 〈早大〉
- ひしやもんの本地（題簽）〔江戸前期〕写 絵巻 三軸
古屋市立図書館旧蔵 〈名古屋〉
- 高野山大学図書館蔵
○ 大わうひめ（題簽）〔江戸前期〕写 絵巻 三軸 ニュー
ヨーク公立図書館スペンサーコレクション蔵 〈SP〉
- ひしやもん（題簽）〔江戸初期〕写 奈良絵本 横三冊
慶應義塾図書館蔵（室町時物語大成第十一・影印室町物語集
成第五輯所収）
〈慶應甲〉
- ひしやもん（尾題）〔江戸前期〕写 大一冊 慶應義塾図
書館蔵（室町時代物語大成第十一所収） 〈慶應乙〉
- ひしやもんのほんし（扉題）〔江戸後期〕写 半三冊 名
古屋市立図書館旧蔵 〈名古屋〉

○ 毘沙門天王之本地（内題） 承応三年刊 絵入 大三冊

慶應義塾図書館・東京大学霞亭文庫蔵（室町時代物語集第

二・室町時代物語大成第十一所収） 〈刊本〉

以上のほか、明治以後の活字翻印で、底本の明示されていないものに、次の諸書に掲載された本がある。

○ 新編御伽草子（萩野由之編、明治三十四年）所収本

○ 校注日本文学大系第十九卷（尾上八郎編、大正十四年）所収本

○ 新釈日本文学叢書第二輯第七卷「御伽草子集」（内海弘蔵編、

昭和五年）所収本

○ 岩波文庫「お伽草子」（島津久基編、昭和十一年）所収本

○ 雄山閣文庫「御伽草子二」（昭和十四年）所収本

○ 東洋学芸雑誌第八十一・八十二・八十四・八十六・八十七号所収本

新編御伽草子本以下、雄山閣文庫本までの五本は、全く同一の本文を有する。新編御伽草子本に、以下の四本は拠ったのではないかと思われるので、同書を以て五本を代表させ、〈新編〉の略号を用いることとする。また、東洋学芸雑誌所収本については、冒頭に「此書ハ予ガ嘗テ坊間ニテ購ヒタル絵本古物語ニシ

テ、其絵タルヤ土佐派ノ極彩色ニテ合色極メテ妙ナリ（中略）
因テ之ヲ本誌ニ掲ケ同好ノ諸士ニ示ス、但シ文字ハ原書ハ首トシテ平仮名ヲ用フレトモ、今多ク漢字ヲ填入シテ通読ノ便ニ供ス 青萍逸人識」とある。すなわち、末松謙澄氏が架蔵の奈良絵本を底本とした翻印である。よって、略号には〈末松〉を用いることとする。

上記の諸本を本文によって類別すると、次のようになる。

A類

第一種 (イ) 〈反町〉 〈早大〉 〈新編〉

(ロ) 〈高野山〉

(ハ) 〈SP〉

第二種 〈慶應甲〉 〈末松〉

B類 〈名古屋〉

C類 〈慶應乙〉

D類 〈刊本〉

以下、類別した各系統の本文の関係について述べる。

A類諸本

A類とした七本には、同じ個所に、やや長い脱文が共通して

見られることから、同一の祖本より分岐した本であることが明らかである。

第一種(イ)の三本は、語句の末に所々僅な相違がある程度で、たがいに誤脱の字を補い合うことができる。〈反町〉と〈早大〉は上中下の巻分けの個所も一致し、〈早大〉は〈反町〉の中巻に当る一冊を欠いている。〈新編〉は三本のうち、最も誤脱が多く、善本とはなし難い。従って、この三本の中では〈反町〉を以て代表せしめるのが適当と思われる。なお〈反町〉と〈早大〉の挿絵について見ると、上巻は〈反町〉の六図のうち、第五図までは、挿入個所が〈早大〉も一致し、第六図の所は〈早大〉は片面が白紙になっている。下巻は、〈反町〉に五図、〈早大〉に七図の挿絵があるが、そのうちの四図は二本の位置が一致し、二図は〈早大〉にあって〈反町〉に無く、一図は位置が少しく違っていて、完全には合致しない。ところが〈早大〉の挿絵は、第二種の〈慶應甲〉と較べると、上巻と下巻に関する限り、挿入されている位置も、描かれている情景も、全く一致する。構図も、左右が反対になっている個所は多いが、かなり近似しているのである。このことは、第一種本と第二種本との関係を推測する上で、本文と共に問題になるであろう。

次に、第一種の(ロ)〈高野山〉と(ハ)〈SP〉の二本も、基本的には、(イ)〈反町〉と同系統の本文であることが認められるが、部分的に異文の個所がかなり多く見られる。主な個所を挙げてみる。

(例1)

〈反町〉　むかしてんちくに国あり、なをはくる国とそ申ける、そのくに、わう一人おはします、御なをは、せんさいわうとそ申ける、よろづめでたき事、人にすぐれておはします、ときにしたかひて、たからのふる事、あめのごとくなり、いづれも一てんかに、おろかなることおはせとも、これをためしすくなき事にて申ける、あめしたになひかぬくさ木もなし、たから日にしたかひてふりくたり、しろかねこかねのついに、こかねのとひらをたて、にはには、こんくゝるりをしき、こかねのあさをちりはめ、せんすいのこたちは、ひかりをましへたるこゝちして、おもしろき事申はかりなし、大りに、わしのはたかのはにて、ゑんしちづくにそふかれたり、こかねのかわらに、しろかねのゆかをならへ、にしきのきちやうをたてられたり、百八十けんのたまのみすに、こかねのてんを百廿ちやうにくまれたり、そのうちに、一万人のくき

やう大しん、三千人の女はうたち、いねうせられておはしま
すありさま、ためしすくなくこそみへさせ給ふ

〔高野山〕 むかしてんちくにくにあり、名をはくるこくとそ
申ける、その国のわう一人そおはします、御名をは、せんさ
いわうとそ申ける、よろつめてたき事、人にすぐれておはし
ます、時にしたかひて、たからのふるこ、雨のことくなり、
いつれも一てんかに、をろかなる事おはせず、是をためしす
くなきことにそ申ける、あめかしたになひかぬ草木もなく、
たからは日にしたかつてふりくたり、白かねこかねのつゐち
をつき、こかねの戸ひらをたて、庭には、こんくゝるりをし
き、こかねのいさをちりはめ、せんすいの木立は空にのほ
り、ひかりをましへたる心ちして、おもしろき事中、申はか
りもなし、たいりには、わしの羽たかのはにて、えんしつ作
にそふかれたり、金のかはらに、白かねの床をならへ、錦の
木丁を立られたり、百八十けん玉のみすに、こかねのてん
を百廿ちやうにくまれたり、そのうちに、一万人のくきやう
大臣、三千人の女房たち、いねうかつかうせられておはしま
すありさま、ためしすくなくそみえさせ給ひける

〔SP〕 むかしてんちくくに国あり、名をはくるこくとそ申け

る、そのくに、御かと一人おはします、御名をは、せんさ
いわうとそ申ける、よろつ目出度事、人にすぐれておはしま
す、時にしたかひて、たからのふるこ、雨のことくなり、
いつれも、国民草木まで、なひかぬものはなかりけり、さる
により、しろかねのついちに、こかねの門をたて、庭には、
こんくゝるりをしき、こかねのいさをちりはめ、まことに、
せんすい木たちまで、こゝろもことはもおはれず、たとへ
ていはんかたもなし、たいりのうへをは、わしたかはにてそ
ふかれたり、こかねのかはら、しろかねのゆかをならへ、に
しきのきちやうをたてられ、百八十けんたまのみすに、こ
かねのてんを百二十ちやうにくまれたり、そのうちに、一ま
んにんのくきやう大臣、三千人の女はうたちそおはします、
御有さま、ためしすくなくそ見えさせたまふ

右の傍線AからHまでの八個所以外は、三本共にほとんど同文
である。異なる部分について見ると、BFHは〔反町〕〔高野
山〕の二本は一致するのに対して、〔SP〕だけが異なってい
る。また、ACEGも〔SP〕だけは相当する語句を欠いてい
る。〔高野山〕だけが異なるのはDで、この語句は〔反町〕〔S
P〕には無い。この一節に関しては、〔反町〕〔高野山〕はきわ

めて近く、〈SP〉のみが独自の文章を有している。しかし〈反町〉と〈高野山〉の間にも問題にすべき個所がある。Aの文において、〈反町〉の「おろかなることおはせとも」が、〈高野山〉では「をろかなる事おはせず」とあって、意味が反対になっている点である。これは、どちらでも文意は通るのであるが、第二種本の〈慶應甲〉を見ると、この個所は「いづれも一天下には、をろかなる事もおはせし物なれとも、これをはためしすくなき事にそ申ける」とあって、〈反町〉と同意の文である。この所は前後の文脈から考えて、〈反町〉や〈慶應甲〉のように「いくらめでたいといっても、何かの欠点はあるものだけれども」の意が本来であったと思われるが、表現が明確でなかったために〈高野山〉が誤ったのであろう。〈SP〉が「いづれも」の一語だけ残しながら、以下の一文を欠いているのも、文意をはかりかねたためかもしれない。また、Gの「ゑんしちつく」「えんしつ作」も、意味のよくわからない語である。これも〈慶應甲〉には「ゑんしちつくり」と出ている。〈新編〉は「宴室造り」と宛てているが、その意味かどうかは疑問である。この語が〈SP〉に欠けているのも、意味がわからなかったためではなからうか。

(例2)

〈反町〉 さるほとに、月くまなくすみほるに、まやこくのかたより、むらくも一むら^Aひきおほひけり、ひめみや御らんして、あはれ、まやこくより^(ママ)うかするせいやらんと、おほしめして、かく^Dそのたまふ

あまつそら、くものかよひち、ふみわけて、月ならすして、たれかゆくらん

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍るくものやうかなとのたまへは、むらくものたちより、人おりくたり、かくなん

七夕の、くもいのそらに、すむ水の、きみゆへいまは、おちまさるかな

とて、おちくる人をみたまへは、とし^E十七八はかりなる人なり、御なをしのいつくしきに、くれなるのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさね、ゆゝしくひんつらふきなしたまひたるやう、たゝ人ともおほへす見へさせたまひけるか、のたまひしは、君はいかなる人にてましますは、御こゑ^Hそらのくもまで、めてたくきこへさせたまへは、おもひのほかにあまくたるなりと、おほせありければ、ひめみやのたまふやう、

我はこれ、くるこくの大わうの(ママ)に、てん大たまひめといふなり

〈高野山〉 さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むら雲一むらAな引おほひきたり、姫宮のかたへなひきけり、宮御らんして、あはれまやこくよりよする勢やらん、おほつかなしとおほしめして、こころほそくも、BかCくそよみ給ふD

天つ空、雲のかよひち、ふみわけて、月ならずして、誰か行らむ

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍る雲のけしきかなとのたまへは、むら雲の中より、人おりくたり、かくなん

たなはたの、雲のそらには、すむみつの、君ゆへ今は、おちまさるかな

とて、おちくる人をみたまへは、Eとしのよはひ十七八はかりなる人の、御なふしのいつくしきに、くれなるのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさねき、ゆゝしきひんつらふきなかし給ひたるけしき、たゝ人ともおほえぬよそほひにてみえさせ給ひけるか、Gかくの給ふは、いかなる人にてましますは、

H雲の中より御こゑきこえ、めてたき御すかたにてきこえさせたまへはどの給へは、Iかの人、おもひのほかにあまくたるなりと、おほせありければ、ひめ宮こたへ給ふやう、身つからはこれ、くるこくの大わうの、てんたい玉姫といふなり

〈SP〉 さるほとに、月くまなくすみのほるに、まやこくのかたより、むらくも一むらAひきおほひけり、ひめみや御覽して、あはれ、まやこくよりよするせいやらんと、おほしめして

あまつ空、くものかよひち、ふみ分て、月ならずして、たれかゆく覽

となかめ給ひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそと、いとやさしく侍るくものやうかなとの給へは、むらくものうちより、人おりくたり、かくなん

七夕の、雲井のそらに、すむみつの、きみゆへ今は、おちまさる哉

とて、おちくる人をみ給へは、E年十七八はかりなる人なるか、御なをしのいつくしきに、くれなるのすゝしのさしぬきに、しろきしたかさね、ゆゝしくひんつらふきなかし給ひたるやう、たゝ人ともおほえす見えさせ給ひけるか、Gの給ひしは、

きみはいかなる人にてましますは、^H御こゑそらのくもまで、
 めてたくきこえさせたまへは、^Iおもひのほかにあまくたるな
 りと、おほせありければ、ひめみや、の給ふやう、我はこれ
 くるこくの大わうの姫みや、大玉姫とこたへさせまします
 この一節では(例文1)とは逆に、A B C E Fのように、^高野山だけ
 が異なる個所が多い。また、G H Iも^{反町}と^SPは一致し、^{高野山}のみに
 違いが見られるが、この個所は文意に問題がある。^{反町}と^SPでは、Gの「のたまひし
 は」の主語は、天空から降ってきた金色太子で、HもIも太子
 の言葉になっている。一方^{高野山}では、Gが「かくの給ふ
 は」とあるので、ここから会話の言葉となり、その主語は前文
 からの続きからすれば太子である。しかし、後文への続きを見
 ると、Hの終りに「との給へは」が、Iの初めに「かの人」の
 二語が入っている。Iの部分が太子の言葉となり、Gから
 Hへかけての部分は姫宮の言葉と解さなければならなくなる。
^{反町}と^SPの方も、G Hの間の「君はいかなる人にてまし
 ませは」と、次のHとの続きぐあいはなめらかでなく、脱文が
 あるのではないかとも思われるが、^{高野山}の文脈の錯雑は、
 それと関連するのかもしれない。この部分は第二種の^{慶應甲}

では次のようになっている。

^{慶應甲} かくてその人をみ給へは(中略)たゝ人ともおほ
 えす見えさせ給ふほに、ひめ君おほせけるやうは、いかな
 る人にて侍れば、かやうにあまくたり給ふそと、おほせけれ
 は、御ことこそ、いかなる人にてわたらせ給へは、御こゑ雲
 ゐまで、めてたくきこえ侍れば、おもひのほかにくたる也と
 有しかは

この文では、姫君と太子との間で交された会話として、はっき
 り区別して述べられている。この場面では、このように天空か
 ら降ってきた太子を見て、姫君がまず問い、太子が答えるとい
 うのが、自然な運びであろう。第一種の諸本も、本来は^{慶應}
^甲のような本文であったのが、脱文を生じたのではなかつた
 かと考えられる。

(例3)

^{反町} さてひめみやは、くるこくへ^Aおもひのほかかへり給
 ふ、人々^Bさはきあへる、大わう、いそきとひ給へは、^C御とも
 の人々、此よしありのまゝ^D申、大わうきこしめして、さては、
 大わうまことの道にいりたまふやと、ひめみやにちきりをむ
 すひ給ふゆへにやとて、御なみたをなかさせおはします、ひ

めみやかへらせおはします事、御よろこひかきりなし、御よ
ろこひのなかにも、ひめみやは、^H太子にちきり給ふとし月も
かさならぬに、^I日にそへて恋しく、^Jはるかなる道のほど、い
たはしくそおほしめし、^K袖のひるまもおはします事
〈高野山〉 さても姫宮は、くるこくさしてかへり給ふに、人
くさはきあへり、^Bそのとき、ちゝ大わうも、御はゝきさき
も、夢の心ちし給ひて、しはしありてとひたまへは、^C御とも
の人く、このよしありのまゝに、大わうへそうもんしけれ
は、大わう聞しめして、^Dさては、まことのみにいりたるそ
や、姫宮も太子に契をむすふことよとて、御なみたをなかさ
せおはします、ひめみやかへらせおはします、御よろこひは
かきりなし、^Gさるほどに、ひめみやは、太子にいとかりそめ
の契りゆへに、かへりおはしましたけるか、^H太子にわかれ給ふ
とし月もかさなり給ふにつけて、^I日にそへて恋しく、^Jはるか
なるみちのほどをも、いたはしくて、明暮思ひくらしおほし
めし、^K御袖のしからみも、ひるまもなくおはします事
〈SP〉 さてひめみやは、くるこく^Aおもひのほかにかへり給
ふ、人くさはきたまひけり、^Bことのよしを大わう、いそき
とはせたまへは、^C御ともの人く、つふさにそうもんある、

みかときこしめして、^Dさては太子、ことのみちにいりたまふ
や、これもひとへに、姫宮にちきりをむすひたまひしゆへに
やとて御なみたをなかさせおはします、^Eとにふれかくにつけ
ても、ひめ宮のかへらせたまひし事の目出度さよと、御よろ
こひかきりなし、^Fかゝる中にも、^I姫みやは、太子の御なを恋
しくおほしめし、^Jまことにはるかなるみちをゆき給はん事の
かなしやと、^K御そてのかはくひまはなかりけり

この一節は、三本の間で異同のある個所が多く、〈反町〉と〈高
野山〉が一致し〈SP〉だけが異なる所—EHI、〈反町〉と
〈SP〉が一致し〈高野山〉だけが異なる所—AFG、三本それ
ぞれに少しづつ違ふ所—BCDJK、が交錯している。ただ、
〈高野山〉と〈SP〉が同じで〈反町〉だけの異なる個所は見ら
れない。このことは、〈反町〉系統の本文を基礎にして、〈高野
山〉と〈SP〉とは、それぞれ独自に本文を改変したことを示
すものと考えてよいであろう。また、この一節の〈慶應甲〉の
本文を見ると

〈慶應甲〉 さて姫宮は、くるこくへ思ひのほかにかへり給へ
は、人くさはきけり、大わう、いそきとひ給へは、御とも
の人く、しかくの事、ありのまゝに申ければ、大王きこし

めして、さては、大わうまことの道に入給ふやと、姫みやに契をむすひ給ひしゆへにやと、御なみたをなかせおはしませ、さて、ひめみやかへらせ給ふ事、御よろこひはかきりなし、されとも、ひめみやは、たいしに契給ひて、いまたとし月もかさならざるに、日にそへてこひしく、はるかなるみちのほど、いたはしくおほしめし、袖のひるまもおはしまさす

とあつて、〈高野山〉や〈SP〉よりも〈反町〉にきわめて近い。とくに、Dのような文意が明瞭でない個所まで一致しているのは、〈慶應甲〉もまた、〈反町〉系の本文と密接していたことを窺わしめる。

(例4)

〈反町〉 さて、のりたまへるりう、たへかねてふしぬ、そのときたいし、御なみたをなかしたまひ、いかにやなんち、ちくしやうなりといふとも、我このみちにまよふへきよしを、よにうれしけにてありしにより、おもひたちぬるみつからを、何となれとおもふぞ、たとひこらへかたくとも、これまできたるに、ことにでうやのやみに、すてをくへきかとして、くれないのなみたをなかし給ふ、りうも、きなるなみたをなかし

けり、まことに御いたはしく候へは、おくりつけまいらせんとは、おもひまいらせ候へとも、りうは三ねんかはね、いきとまるならいなり、はらすちきれて、いきとまりとて、よにくるしけにて見へければ

〈高野山〉 さて、のり給へるりうめ、たへかねてふしぬ、其時たいし、御涙をなかし給ひ、いかにやなんち、ちくしやう也といふ共、我この道に迷ふへきよしを、世にうれしけにてありしにより、思ひ立ぬる身つからを、何となれと思ふぞ、たとひこらへかたくとも、是まで来るに、ことにちやうやのみちに、捨をくへきかとして、紅の泪をなかし給ふ、りうめも、きなるなみたをそなかしける、そのときりうめ、物を申けり、まことに御いたはしく候て、をくりつけ参らせたく候へとも、りうめは三年かはね、いきとまるならひなり、はらすちきれて、行とまるとて、世にくるしけにてみえければ

〈SP〉 さて、のりたまへるりう、たえかねふしにけり、そのとき太子、御なみたをなかせ、いかにやなんち、ちくしやうなりといふとも、われこのみちにまよふをも、よにもうれしけにてありしにより、おもひたちぬるみつからを、なにとなれとかおもふぞや、たとへはこらへかたくとも、これま

てきたり、そのうへちやうやのやみに、すてをくへきかと、
くれなるのなみたをなかせたまふ、りうも、きなるなみたを
そなかしける、^Bそのときりう、ものを申しり、まことに御い
たはしく候へは、をくりとけまいらせんとおもへとも、り
うは三ねんかはねは、いきとまるならひなれば、はらすちき
れて、いきとまり候とて、よにもくるしけに見えにける

この一節は、Aの「りう」と「りうめ（竜馬）」のような違いが
あるだけで、三本共にさして変っていない。しかし、Bの一文
は〈反町〉にだけ欠けていて、(例3)までに見られなかった
異同の関係である。ここでは〈反町〉から〈高野山〉〈SP〉が
分岐したとは言えなくなるのであるが、この個所は〈新編〉に
も「その時竜、物を申しける」の句が入っており、〈慶應甲〉
も「りうも、きなるなみたをなかせして、物を申しり」とある。
〈早大〉は中巻欠のため不明。従って、ここは〈反町〉単独
の脱文であって、〈高野山〉や〈SP〉は〈反町〉の上位にある
本から分岐したものと見てよいであろう。

(例5)

〈反町〉 ひしやもんでんわうとあらはれて、よろつの人の、
ふくをねかはんときは、此はこのふたをあげ給ふへしとて、

三つあるはこのなかに、すこしちいさきをとりにたし、太子
にたてまつり給ふ、一さいしゆしやうのねかはん時は、これ
をまきたまへと、おほせければ、ひめみやも太子も、よろこ
ひ給ふ事かきりなし

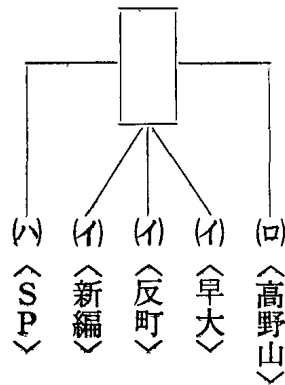
〈高野山〉 ひしやもん天王とあらはれて、よろつの人の、ふ
くをねかはんときは、この筥のふたをあげ給ふへしとて、三
つあるはこの中に、すこしちいさきをとりにたし、太子にた
てまつり給ふ、^Aひめ宮は、ひきやうの玉を奉り給ふ、一さい
しゆしやうのねかはん時、これをまきたまへは、ひめ宮も太
子、よろこひ給ふことかきりなし

〈SP〉 ひしやもんでんわうとあらはれて、よろつの人の、ふ
くをねかはんときは、此はこのふたをあげ給ふへしとて、三
つあるはこのなかに、^Aすこしちいさきをとりにたし、太子に
たてまつりたまふ、^A姫宮は、ひきやうのたまをたてまつり給
ふ、一さいしゆしやうのねかはんときは、これをまきたまへ
と、おほせければ、ひめみやも太子も、よろこひ給ふ事かき
りなし

この一節でも、Aの一文は〈反町〉にだけ欠けている。しかし、
ここも〈新編〉〈早大〉〈慶應甲〉の諸本は、いずれもAを備え

ているので、(例4)のBの場合と同じに考えることができる。ただし、〈早大〉〈高野山〉〈SP〉の三本の本文では、姫宮に連れられて大梵王の前に出た金色太子に、大梵王が宝の小箱を授け、さらに姫宮も太子に飛行の玉を与えたという意味になっているが、それだと、Aの後の「一さいしゆしやうのねかはん時は云々」の文への続きが悪い。〈新編〉と〈慶應甲〉では、Aの文の主語「ひめ宮は」が「ひめみやには」とある。これだと、大梵王が太子には小箱を、姫宮には飛行の玉を与えたとの意になり、後の文への続きは良くなる。しかし、この飛行の玉については、少し前の所に、姫宮が「みつからは、てんのひきやうと申物をもちたり」と太子に語ったという記事が、A類第一種第二種の諸本すべてに出ている。従って、ここでは、太子に飛行の玉を与えたのは、姫宮でないと矛盾することになる。このように前後の叙述から考えると、Aの一文は、やはり〈高野山〉や〈SP〉が原型であり、〈新編〉や〈慶應甲〉は、(例文5)の部分だけで文章の合理化をはかったものと思われる。そして〈反町〉がこの一文を欠くのも、不注意による脱落ではなく、これも後の文への続きを良くするために、意識的に省略したのであったかも知れない。

以上によって、A類第一種の五本は、左のごとく関係づけることができるであろう。



なお、第一種の(イ)(ロ)の三種の間における本文の異同は物語の前半部に多く、金色太子が姫宮を尋ねて天空を遍歴する後半部では少くなっている。

A類第二種の〈慶應甲〉と〈末松〉は、大部分は語句の末に小異がある程度で、明らかに同系の本文である。主な相違箇所を挙げれば、次の通りである。前が〈慶應甲〉、後が〈末松〉である。

(1) いづれも一天下には、をろかなる事もおはせし物なれとも、これをはためしすくなき事にぞ申ける、まことにあめかしたに、なひかぬ草木もなし——何れも一天まことに、靡かぬ草木もなし

(2) せめてひめ宮にてもおはしまさねは、これをのみ、あさ
夕なげき給ふ——せめて姫宮にてもおはしまさばと、それを
のみ、朝夕なげき玉ふ

(3) ひとへに、ちこくのしゆしやうを、仏のすくはせ給ふに
ことならず——ひとへに修羅地獄の仏、衆生を救はせ玉ふに
異ならず

(4) われはしやはせかいにはあらず、大ほんわうくうの、こ
かねのつゝると申所に、はやむまれかはりて侍る也——我は
黄金の筒井と申す処に、早や生れ換りて侍るなり、娑婆世界
にはあらず、大梵王宮の都なり

(5) 女人、さやうの所ありとはきゝ侍れども、くはしき事は
きゝ侍らす、これよりにしにむかひ給ひて、三年みをおはし
て、めてたき僧にあはせ給はん、とひ給へ——女人きゝ玉
ひ、左様の処ありとは聞およべども、委しきことは知り侍ら
ず候、去りながら、これより西に向ひて、三年三月行かせ玉
はゞ、目出度僧に逢はせ玉はん、問ひ玉へ

(6) しらぬみちをたどり行事、露のいのちもおしからすとて、
なみたをなかし給へは——知らぬ途をたどり行くこと、露の
命をしからねども、かやうにまよひ申事よとて、なみだを

ながし玉へば

(7) 六年かはね、いきとまるならひなり、はらすちきれて、
いきとまとて、よにくるしけに見えければ——六年飼ね、
息とまり、腹筋きれて、喉乾燥くとて、世に苦しげなる息を
つき、申ければ

(8) 大ほんわうくうの、こかねのつゝ井と申所を、しらせ給
ふかと、おほせられければ、そう、いかなる人なれば、うろ
の身にて、これまてはきたり給ふそや——大梵王宮の黄金の
筒井と申処を、有漏の身にて、是れ迄は来り玉ふぞや

(9) 人のため、よき事をはそねみて、ためあしき事をはよろ
こひ——人のため、よき事をはそねみねたみ、悪しき事をは
喜び

(10) 三日はかりおはしまして、御らんしければ、うつくしき
しらはま有、それを御らんすれば、いとすゝしき風ふきて、
こ松おひならひたり——三日計りおはしまして、御覧ずれば、
いと涼しき風吹き、小松生ひ並びたり

(11) 太子これを御らんして、あはれ姫宮をたつねまとはぬ身
なりせば、かやうのたつときところにあらまほしくて、御こ
ころもとまりて、しはらくやすらはせたまへとも、さて有

へきにあらされは、こゝをもすこし給ふ、姫みやをたつねこすは、かゝる有かたき所を、いかてか見んとおほしつゝ、又そらへいそきのほり給ふ（中略）やゝ久くありて、こひかなしひ給ふ姫宮とおほしきか、こかねの花かこに、こかねの花を入れて、みつからもたせ給ひておはしますをみ給へは、もとよりも有し御すかたにいやまして、うつくしき事、中々ことはにはをよひかたく——太子是を御覽じて、あはれ姫宮に何時か逢せ玉はんと急ぎ玉ふ（中略）やゝ久しくありて、恋ひかなしみ玉ふ姫宮と思しきが、黄金の花籃かごに、黄金の花を入れて、身づから持せ玉ひておはしますを見玉へば、素より尋ね惑はぬ身なりせば、斯様の貴き処にあらまほしくて、御心も留まりて、暫らく休らはせ玉へども、さてあるべきにあらざれば、此処をも過し玉ふ、姫君を尋ね来らずは、斯る有難き処を、如何でか見んと思しつゝ、又空へ急ぎのぼり玉ふ、さて姫宮は、有し御容貌すがたに弥増いよまして、美しきこと、中々言葉には及び難く

以上のうち（1）（8）（10）の傍線部分は「末松」の脱文、または省略と考えられる。（2）（3）（4）（5）（7）は表現の違いであるが、この個所を第一種本と比較すると、すべて「慶

應甲」の方が第一種本と合致する。また（6）は「末松」の方に「慶應甲」に無い傍線の一句が入っているが、これも第一種本に合致するのは「慶應甲」である。（11）は相違の最も大きい個所で、傍線の長い一文が、（中略）の個所（この部分は二本ほとんど同文である）をはさんで、前と後とに位置が変わっている。しかし、ここは叙述の順序からいって「慶應甲」の形でなければならず、第一種本も「慶應甲」と同様である。おそらく「末松」の底本に錯簡があつたのであろう。残る（9）は、第一種本の「反町」を見ると、「人のためよき事そねみねたみ、あしき事をよろこひ」とあつて、ここだけは「末松」が第一種本と合致する。この個所の「慶應甲」の「そねみて、ためあしき事」という表現には、やや不自然な感じがある。おそらく第二種本も「慶應甲」の上位の本にあつては、「末松」のごとき文であつたのではないか。

以上を総合すると、第二種の本文の正系を承けるのは「慶應甲」と見るべきである。「末松」はその本文にいくらかの改変を加えたほか、不注意による説脱を犯したものであろう。

第二種本の本文は、これまでに挙げてきた例からも窺えるように、第一種本と密接な関係を有している。部分的に見れば、

第一種の(回)〈高野山〉(イ)〈SP〉よりも、(イ)〈反町〉に近い所もあるが、全体としては〈反町〉との間での細かい異同が挙げきれないほどに多い。主な個所を挙げて比較してみる。

(例6)

〈反町〉 されとも、ゆくすへせんしうはんせいを、たもたせ給ふへきとおほしめせとも、^Aおいの身は人をもきはぬ事なれば、大わうもきさきも、よわいかたふきまします事こそあはれなれ

〈慶應甲〉 さるほとに、行すゑせんしうはんせいを、たもたせ給ふへきとおほしめせとも、^Aおひする事はくらゐもをそれぬ物なれば、大わうもきさきも、よはひかたふき給ふそあはれなる

(例7)

〈反町〉 きさきは、さきのよは、日ほんみのゝ国の、二ひろくちなわにてありしか、ものゝいのちをころしつるか、^Bほけきやうの御こゑを、みゝにふれしにより、かたしけなくも、きさきのくらしいにむまれたまへども、こたねあたはず

〈慶應甲〉 又きさきのせんしやうは、日本みのゝ国の、二いろくちなはにて有しか、物のいのちをとりつれとも、^Bほつけ

きやうどくじゆするを、あるたうにてみゝにふれしゆへ、きさきのくらゐにうまれ給へとも、^Cこれもくわこにて物のいのちをとりしゆへに、こたねあたはず

(例8)

〈反町〉 さてなをふしきの事あり、大わうの御とし九十にてましますか、此ひめ君いてき給へは、廿はかりにわかくなり給ふ、きさきは六十にておはしますか、^D十七八にそみへ給ふ、くはんはくとの北の御かたはめのとにて、五十はかりになら

せ給ふか、それも十七八にそみへ給ふ、それならず、このひめみやおかみ申人、わかきはいきやうつき、おいたるはわかくなる、^E人々申給ふやう、御かと、このひめみやいてきさせたまひてより、きさきもみなく、わかくならせ給ふ事、^Fありかたき御事と申もおろかなり、されは、たかきもいやし

きも、^Fまいりておかみ申けり、よろこぶ事かきりなし

〈慶應甲〉 かくてふしきの事侍り、大わうの御とし九十にてましますか、此姫君いてき給ひてより、廿はかりにわかやき給ふ、^Dきさきも六十にておはせしか、十七八にそ見え給ひける、御めのとにまいり給ふくわんはく殿のきたのかたも、五

十はかりにて侍しか、これも十七八にみえ給ふ、それならず、

此女ひめみや宮おかみ申人、わかきはあひきやうつき、おひたるはわ
かくなりければ、まことにありかたき事、申は中くをろか
也、されは、たかきもいやしきも、くんじゆして、おかみた
てまつる事かきりなし

以上三例の、傍線を付した個所について見ると、Aは大王と后
に関する事であるから、〈慶應甲〉の方が適切なことばのよ
うに思われる。Bも〈慶應甲〉のごとく「あるたうにて」の語
のある方が表現としてゆき届いており、また〈反町〉に欠ける
Cの句も、これのある方が、下の「こたねあたはず」への続き
が良い。次の(例8)は全体に詞章に相違の多い所であるが、
ここもDは〈慶應甲〉の表現の方が整っている。Eは〈反町〉
にだけある文であるが、これは前文の繰り返しであって、やや
くどい表現となっている。

(例9)

〈反町〉 ひめみやのたまふやう、我はこれ、くるこくの大わ
う(ママ)のに、てん大たまひめといふなり、われいかなる事にか、
見る人としわかくなり、わき人(ママ)は、あいきやうつくにより、
まやこくの大わうきこしめして、我をむかへとり、御としわ
かくなりたまはんとて、御Aつかいあり、ちの大わうへたひ

くつかはされける、ち大わうも、はきさきも、た一人
ある子を、いかつかわさるへきとて、おしませ給ふ事か
きりなし、さてまやこくの大わういかりをなして、そのきな
らは、くるこくをうちとるへし、まやこくは十八万きのとこ
ろなり、くるこくは十一万きの所なり、いかてかたてやうへ
きとて、大わうもきさきもなけき給ふ、十八まんきのせいには
せめらるゝとも、みつからをはつかはすましきと侍れども、
我おやのけふやうに、すみいたり、されども、心くるし
きたひのそら、月のいるさの山もゆかしく、なかめつるなり
と、こたへ給へは、そのとき、あまくたり給ふ御かた、おほ
せけるは、われはこれ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こ
んしき太子と申ものなり、くるこくの大わう、ひめみや御を
しみのよし、うけ給をよひまいらせ候、われにちきりをなし
たまは、ひめみやをは、これよりくるこくへ返し、まやこ
くを、われ一人ゆきて、たいちしたてまつらんと、のたまへ
は
〈慶應甲〉 ひめ宮のたまふやう、我はこれ、くる国の大わう
のこ、てんおほたまひめといふなり、されは、我をひとめ見
る人は、おひたるはわかくなり、わかき人は、あひきやうつ

くにより、まやこくの大王きよをよひ給ひて、我をむかへと
 り、としわかく成給はんとて、御つかひありしかとも、ちよ
 大わうにも、きさきにも、ひとり子にて侍れば、おしみ給ふ
 事かきりなくて、うけひき給はされは、まやこくの大王びき
 りんありて、くるこくはせうこく、わつか十万きの所なり、
 まやこくは十八万きの国なれば、うちしたかへて、我をとら
 んときこえけれども、我をはつかはすましきと、ちよはよの
 たまへとも、おやの命をいたはりて、すよみて出侍れとも、
 心くるしきたひのそら、月のいるの山もゆかしく、なかめつ
 るなりと、かたり給へは、その時、あまくたり人、おほせけ
 るは、我はこれ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こんしき
 太子と申もの也、されは、たよいまの御物かたりのよしを、
 きよをよひて、これまでまいりて候、われにちきりをなし給
 はよ、これよりくるこくへ返したてまつりて、まやこくをは、
 我一人まいりて、たいちせむと、のたまへは

この一節では、とくにCDEFGの一連の文における異同が問
 題である。〈反町〉の文では、Cの主語はまや国の大王であり、
 Eの主語はくる国の大王と后であるが、その間のDは、CEの
 どちらに続くのか、文脈が不明瞭である。Cを承ければ、まや

国の大王のことばとなり、Eへ続ければ、くる国の大王后のこ
 とばとなる。前後のどちらかに、接続を示す語を入れるべき文
 である。この所を第一種本の〈SP〉は
 さてまやこくの大わう、いかりをなして、そのきならば、く
 るこくをうちとり、ひめをとらんとのせんしなりけり、ちよ
 大わう、たとへまやこくの大せいにはせめらるゝとも、身つ
 からをはつかはすましきと、の給へとも
 というふうには、DEの部分がなく簡略化されながら、文意は通
 じてある。しかし〈高野山〉は〈反町〉とほとんど同文である
 から、〈反町〉のような形が第一種本の原型であったとして良
 いであろう。おそらく、この種の物語の詞章によく見られる例
 で、文章を綴ってゆく間に表現が屈折してしまったのであろう。
 これに対して〈慶應甲〉では、CDを入れ替えた形になってい
 て、ここではDはまや国の大王のことばとして、文脈が通って
 いる。そしてEFがなく、Gへ直接に連なっているが、この部
 分などは、〈慶應甲〉から〈反町〉の錯雑した文への変化は考え
 にくく、〈反町〉を〈慶應甲〉が改めて文意を通したと解するの
 が妥当のように思われる。その他、ABHの個所も、〈反町〉
 に較べ〈慶應甲〉の方が、整理された文章になっていることが

みとめられる。

(例10)

〈反町〉とまらぬ月日なれば、三とせもすきゆく、ひめみや十六にならせたまふ、あてになをいつくしくみへさせたまふ、ひかりさしそうこちしてみへさせたまへは、いと太子の御ことおほしめしける

〈慶應甲〉とまらぬ月日なれば、三とせも過ゆけは、ひめ君はや十六にならせ給ふ、あてに猶うつくしく、ひかりさしそふ心ちしてみえさせ給へは、いと太子の御事のみおほしめしける

(例11)

〈反町〉さるほとにたいしは、まやこくにて、姫みやのかくれさせ給ふをは、ゆめにもしらせたまはて、はや三とせはたちぬ、せんせの御ちきりうすかりけん、ひめみやの御ことのみにて、あかしくらし給ふ、千人のきさきも、御心にいれさせたまふは、一人もおはしませす、たひめみやの御ことのみにて、あかしたまふ

〈慶應甲〉さるほとに太子は、まやこくにて、姫宮のかくれさせ給ふ事は、夢にもしらすして、三とせもすきぬれば、

ひめ君御心のうちもいかならんと、おほしめしやり、千人のきさきも、さらに御心にいらす、ひめみやの御事のみおほしいて、あかしくらし給ふ

右の二例では、〈反町〉は、AとB、CとDという近接した個所に、同じ文句が使われ、表現の稚拙さを感じさせる。〈慶應甲〉では、Aはなく、CはDと異なった表現になっているが、これも〈慶應甲〉が〈反町〉のような文を改めたのではないであらうか。

(例12)

〈反町〉これまでは、いかなる人のをしへにておはしますそと、とわたたまは、しやはにては、一さいしゆしやうをてらしたまふ、みやうしやうほし、まためいとにては、こくうさうほさつと申そうのをしへと、おほせ候へとのたまへは、太子、こまかに御をし候へは、はるかのみちにまよひしも、はる心ちして、うれしくこそ候へ、かへすくみちひきおはしませとて、むまにうちのりたまひける

〈慶應甲〉これまでは、いかなる人のをしへにてきたりたまひしそと、はせ給は、しやはにては、一さいしゆじやうをてらし給ふ、みやうしやうのほし、又めいとにては、こく

うざうほさつと申せし僧のをしへにて待ると、仰候へとのたまへは、太子は、御をしへのごとく、かの道にまよひ給ひしも、すこしははるゝ心ちして、うれしくこそはへれ、返々みちひきかせ給へとて、馬にうちのり給ひける

右のAの個所は、〈慶應甲〉の文では意味が通らない。「かの道」は「はるかの道」の脱字としても、「御をしへのごとく」では文意が続かず、ここは〈反町〉の「こまかに御をしへ候へは」のごとき句でなければならぬ。ところが、この個所は第一種本においても、次のように異同が見られる。

〈高野山〉 御をしへのごとく、はるかの道にまよひしも、はるゝ心ちして、うれしくこそ候へ

〈SP〉 御そうのをしへにまかせ、はるかのみちにまよひしも、今そはれ行心ちして、うれしくこそはおほしめされける文章として最も整っているのは〈SP〉であるが、〈高野山〉は〈慶應甲〉と同じく「御をしへのごとく」とあって、同じ誤りを犯している。既に第一種本の関係を検討した条で述べた通り、〈高野山〉が直接交渉をもつのは〈反町〉である。また〈慶應甲〉も、第一種本の中では〈反町〉に全体として最も近い本文である。〈高野山〉と〈慶應甲〉との間に直接の承接関係がない

とすれば、このAの文に関しては、〈反町〉の上位に位置する本の本文を、〈高野山〉と〈慶應甲〉が、それぞれ承けたものと考えらるべきであろう。

(例13)

〈反町〉 またかいくしからすとも、このほつしをたのみたまはゝ、われむかしくわんをたて、十あく五きやくのつみつくらんしゆしやうを、みちひかんと思ふなり、しやかによらい、三かいのしゆしやうのくにあわんを、一人もあくしよにおとすへからすと、うけ給しにより、此かた、ちこくもすみ侍り、また六たう四しやうにおもむくみちのはしめ、この川のはしにてさたまり候なり、このゆへに、みつから川のはたをさらすして、一さいしゆしやうをすくうなる、^Bつみふかきさい人は、こくそつもこひすかす、あまりにおもきさい人は、^Cくにかはり候なり、ほのをにまへこかるゝ、又、人になき事いひつけて、なげかせしものなり、とくしやにのまるゝものは、しやはにて、よくしんにちうして、人のものをすくしてとり、わか物をおしみ、あるひは、おとこおんなにこゝろをかけ、まうしうふかくあるゆへに、身のうちよりほのをもへいてゝ、なげき候人なり

〈慶應甲〉 そのうへかひくしからず共、此ほつしをたのみ
給は、我むかしくわんを立、十あく五きやくのつみふかき
しゆしやうなりとも、すくはんとおもふ也、しやかによらい、
三かいのしゆしやうをは、一人もあくしよにおとすへからず
と、ちかひ給ふにより、ちこくもいまはすみ侍りける、又六
たう四しやうにおもむくはしめ、此かはのしにてきたまる
也、このゆへに、みつから此川のはたをさらすして、一さい
しゆしやうをすくう也、されは、つみふかきしゆしやうの身
にかはりて、此ほのほにこかる也、人になき事いひつけた
るものは、此どくしやにのまる也、よくしんにぢうし、我
物をはほとこさす、人の物をわうりやうし、ほしがり、おと
こをんなのれんぼふかきゆへ、身のうちよりかくほのほをい
たし、なけく人なり

Aは〈反町〉〈慶應甲〉二本ともに意味を解しにくい。第一種
本の〈新編〉は「地獄にすみ侍り」、〈SP〉も「ちこくにもす
み侍り」とする。おそらく、このように「地獄に住む」の意で
あるうと思うが、〈高野山〉では〈反町〉と同じく「ちこくもす
み侍り」となっている。ここでも〈反町〉〈高野山〉〈慶應甲〉
の三本が共通の本に基づいていることを窺わせる。次にBは、

〈慶應甲〉はよくわかるが、〈反町〉の文は意味が通じにくい。
第一種本の他本を見ると

〈高野山〉 つみふかきさい人は、こくそつもこひあかす、あ
まりにおもむきさい人のくにかはるなり、ほのほにもえこか
る

〈SP〉 あまりにおもきさいにんは、われらのくにかはり候
也、ほのほにもえこかるそかし

とある。〈SP〉は〈反町〉の文をやや簡略にして意味を通そう
としたごとくであり、〈高野山〉は〈反町〉とほとんど同文であ
る。これを見ても、〈反町〉〈高野山〉のような文が元で、〈慶
應甲〉はそれを改めたものと思われる。またCも、〈反町〉は
文脈が続かない表現であるが、ここは〈高野山〉も〈SP〉も
〈反町〉と同文である。〈慶應甲〉のみが、主語と述語の対応し
た文となっている。

(例14)

〈反町〉 いつれもたゝ人にてはおはしませす、かゝるたつと
きはさつとあらはれ給ふ、一さいしゆじやうのほとけとあら
はれ給ひ、ほんふをすくはんためなり

〈慶應甲〉 いつれもたゝ人にてはおはしませす、かゝるたつ

ときほさつとあらはれ給ふ、ほんふをすくはんために、衆生
となり給ひて見せしめ給ふなり

このAの文も、〈慶應甲〉は、仏菩薩が衆生済度のために仮
に人間と顕れたという本地垂迹の意味を正しく述べているが、
〈反町〉の文では、「一切衆生の仏と顕れ給ひ」は、すぐ前の
「かゝる貴き菩薩と顕れ給ふ」と同じ意味になり、表現が重複
してくる。しかし、ここも〈高野山〉〈SP〉ともに〈反町〉
と同文である。

以上見てきた所によって、第二種の〈慶應甲〉は、第一種の
〈反町〉と叙述の運びは対応しており、〈反町〉よりも文章が整
い、表現が正確になっていることが認められる。〈慶應甲〉の
文がくずれて〈反町〉のようになったのか、〈反町〉のごとき文
を改訂したのが〈慶應甲〉であるのか、俄に断定はし難いが、
上記の例文における比較の結果としては、後者の可能性が大き
いのではないか。そして、第一種の〈高野山〉や〈SP〉も
〈反町〉の文を改めているが、それは〈慶應甲〉とは直接の關係
なく行われている。結局〈反町〉の本文を中心に、他の諸本が、
それぞれ独自の改訂を加えたとする結論になるが、〈高野山〉と
〈SP〉は〈反町〉の改訂であることがほぼ確実と思われるのに

対して、〈慶應甲〉の場合は〈反町〉との關係が二本より遠く、
前後關係にもなお疑問を残す点がある。〈慶應甲〉だけを第二
種本として区別した所以である。五五ページに図示したA類第
一種の五本の關係に付け加えれば、第二種の〈慶應甲〉は、第
一種五本の共通祖本よりさらに上位の本から岐れたものとなす
べきであろうか。

B類の〈名古屋〉は、戦災を受けた由で、本文を明らかにす
ることができないが、「室町時代物語集第二」に解題が載って
いるので、その範囲で他の諸本と比較してみる。本書は大形の
奈良絵本の本文だけを写した本である。挿絵の個所を半丁空白
にしており、それから推測すると、親本は三冊本で、上巻・中
巻に各七頁、下巻に六頁の挿絵の入った奈良絵本である。

〈名古屋〉の本文は、A類諸本と詞章の相違する所がかなり
多く、和歌の数はA類と同じく三十二首であるが、その語句も
異なり、中には全く別な歌もある上、歌のある位置も前後出入
しているという。前記の解題に記載されている相違個所を見る
と、まず、A類諸本に共通している脱文個所が〈名古屋〉には
備わっている。(以下、A類本としては〈反町〉を以て代表さ

せ、他本の主な相違は傍記する。

(例15)

△反町△ りうにうちのり、廿三(三十三)ねんにゆくみちを、十三年に
ゆきつきたまひければ、しゆみせんのことくなる山あり

(脱文)

ひの山とて、ほのをもへこかるゝことひまなし、またそれを
四十九日おはして、この山をみなみに御らんして、せうねつ
大せうねつのしゆくを、にしへゆき給ふへし

△名古屋△ りうにのりて、ゆき給ふほどに、十三ねんにわた
らせ給ひて、御らんすれば、しゆみせんのことくなる山あり
三七日のみちを七日につき、御らんすれば、おしへのことく
に、そうにあい給ふ、うれしくて、むまよりおり、かしこま
つて申給ふやう、ひんなき申ことにて候へとも、大ほんわう
くふの、こかねのつゝるや、しらせ給ふかと、申させ給へは、
いかなる人なれば、うろの身なから、これまでおはしますそ
と、の給へは、太し、しやはにて一夜のちきりをむすひし、
によ人をたつね候とて、なみたをなかし給へは、さやうの所
はきゝて候へとも、くはしくはしり候はすとならず、きりの
(おゝすカ)
はやしを、六十四日おはしまして、又つるきの山より、おひ

さかりたるみちあり、此みちをとるものは、きりさくかこ
とし、しやはにて、ゆく(マ)さかつせんにきりつかるゝ、もの
かすならず、かなしき事かきりなし、此みちを三七日わたら
せ給ひて、又

ひの山とて、ほのをのひまもなく、もへ候はんする所を、四
十日おはして、此山をみなみに御らんして、しやうねんに、
つねにねんしゆして、にしにむきてゆき給へ

右の文は、△反町△だけを読んでいると、脱文を見逃すかもし
れないが、脱文部分の前の文は、太子自身の旅の経過を述べて
いるのに、後の文は、僧が太子に道を教えている言葉であつて、
△名古屋△の一文がなければ、文脈が通じない。このような長
い脱文が、A類本に共通して生じたのは、その祖本の段階で、
一丁分位落ちたのかもしれない。これによつて、△名古屋△は、
現存A類諸本の上位の本に連なっていることが明らかであろう。

(例16)

△反町△ ひめみやも、太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

(脱文)

さて、ふくとく山におはしまして、御らんすれば
△名古屋△ 太しも、ひめみやも、よろこひ給ふことかきりな

し

さて、のり給ひし、りうは、せん(ママ)にしたうしと、あらわれて、

つかへ申ける

さて、ふくとく山へおわしまして、御らんすれば

右は、物語の最後で、太子と姫宮が、福徳山において、毘沙門天・吉祥天女と踊れるという条である。この個所では、〈名古屋〉にある中間の一文は、〈反町〉のようにこれが無くても、

文脈の上で不自然な所はない。必ずしもA類諸本の脱文とは言えないのであるが、C類の〈慶應乙〉にも、この個所に、

太子をこれまで、おくりたてまつるむまなれとて、こくらくの、りうのこまとて、ばとうくわんおんのけしんと、なりにけり

という、やはり龍馬に関する記事が出ている。それに、本地物においては、物語の中の人物だけでなく、主人公の苦難を助けた馬も神と現じたことを語る例が多い。ここも、A類諸本の共通の祖本が、〈名古屋〉のような龍馬に関する一文を、傍線の「さて」という語の重出に目移りして、書き落した可能性が大

きい。
A類諸本の脱文を〈名古屋〉が備えている個所は、以上の二

例であるが、そのほか、A類との大きな相違として、次の一節が挙げられている。

(例17)

〈反町〉 山のはに、かたふく月に、物とはん、わかれし人は、

ありやなしやと

太子のこせをとふらはんとこそ、おほせられしにとて、ゆしき御とふらひとも、せさせたまふ

ひめみや、みつから御きやうあそはして、かくそなかめ給ふ

くらきよの、ひかりともなれ、あさ夕に、みのりの月の、

くまもなれば

と、すさみたまへり

かきりある、わかれなりとも、この世にて、いま一たひの、

あふよしもかな

かやうに、あさゆふなかめたまふ、又かくなん

あさかほを、なにはかなしと、おもふらん、花よりさきに、

われそちるへき

〈名古屋〉 山のはに、かたふく月に、こととはん、わかれし

人は、ありやなしやと

夜もすから、御きやうあそはして、太しの御とふらい、さま

くにし給ておわしければ、大わうも、きさきも、いかならんとて、さま／＼の御いのり、ひまなかりける日かすのふるまゝに、みやはなけきたまふほとに、御まへなるにようたち^(ママ)、よりあいて、太しをゑにうつして、御こゝろをなくさめまいらせんとすれ共、そのかいなし、ひめみや、かくなん

ゑにかきて、見るに心は、なくさまで、いと／＼なみたの、まさるつらさよ

と、おほせられければ、めのと、かくなん

はかなくも、あたしうきよと、しりなから、きみなん^(えか)つゆを、おしむへきかは

みやは、われつれなくなからへて、太し一人、くらきやみにまよわせたてまつり候ことの、かなしさよとて、なげかせ給へは、めのと申けるは、御なけきはさることなれとも、それにつけても、御なからへ候て、のちのよをとふらわせ給へかし、しやうしむしやうのならい、六とうにりんへし給候わんときは、あいまは^(いか)らせたまはん事、しりたまはず、たゞ一人おわしますことを見れば、大わうも、きさきも、御なけき、いよくつみふかくと、申せとも、きへいりさせ給はずして、

かくなむ

あさかほを、なにはかなしと、おもひけん、花よりさきに、きゆるしら露

ここは、くる国の姫宮が、一夜の契りを交した金色太子の帰りを待ちこがれて、ついにはかなくなる条である。〈反町〉は、姫が太子をしのびつつ、四首の歌をよむことだけが記されているが、〈名古屋〉には、女房たちが太子の絵姿を描いて姫を慰めようとしたことが入っている。そして、歌の数は同じ四首であるが、中間の二首は、絵に関する姫の歌と、乳母の歌に変わっている。そこで、この条が、C類の〈慶應乙〉と、D類の〈刊本〉とでは、どのようになっているかを見ると、〈慶應乙〉には、

せめての御事にや、太しの御すかたを、ゑにかゝせ給てそ、御らんしける

という一文がある。また、

めのと申されけるは、まことに、さる御事にてはんへれとも、それにつけても、のちの世をこそ、とふらひまいらせ給へと、いろ／＼なくさめ申給へと、かひなくて、たゞきへいる御心のみはんへる

と、〈名古屋〉に類似した乳母の言葉が出ている。〈慶應乙〉は、全篇を通じて和歌の一首もない特殊な本であるが、(例16)と同じように、この条も〈名古屋〉に通じる内容である。次に〈刊本〉のこの部分は、たいへん変っている。姫が太子の恋しさに空を眺めていると、東の空に観音・勢至が現れて音楽を奏し、西の空には童子が現れて舞い遊ぶ。また、玉手箱の中で人の泣く声が聞えるので、蓋をあけると、鏡に太子の姿が映る。これを見て、姫は太子が空しくなったと思い、嘆き悲しむというのである。ABC三類の諸本とは全く異なっているが、鏡に太子の姿が映るといふのは、〈名古屋〉や〈慶應乙〉の絵姿のこゝと、一脈通じる所が感じられる。このように、A類本のような形と、B類・C類のような絵姿のことを述べる本とが、並び行われていたことが窺われるのである。この二つを較べると、この場面の描写としては、絵姿のことのある方が起伏があつて、すぐれていると思われ、これをA類本のような平板な叙述に改めるのは、不自然なものではないであろうか。

横山氏の「物語集」の解題によって知ることのできる〈名古屋〉の本文の特徴は、以上の程度である。全体としては、C類やD類よりはA類に近く、A類本の上位にある本と関わって

ることが知られるが、部分的にはC類との交渉が見られる。

C類の〈慶應乙〉は、前述のごとく、B類の〈名古屋〉と通じる個所があるが、〈名古屋〉との全篇にわたる比較ができないので、A類との関係によって考察を試みる。〈慶應乙〉の第一の特徴は、和歌が一首も無いことであるが、そのほかの本文は、A類と比較すると、大筋ではほぼ対応した叙述の運びである。しかし、叙述の内容は、詳しい所と簡略な所とがある。

(例18)

〔反町〕むかし、てんちくに国あり、なをはくる国とそ申ける、そのくに、わう一人おはします、御なをはせんさいわうとそ申ける、よろづめでたき事、人にすぐれておはします、^Aときにしたかひて、たからのふる事、あめのごとくなり、いづれも一てんかに、おろかなることおはせとも、これをためしすくなき事にて申ける、あめしたに、なひかぬくさ木もなし、たから日にしたかひてふりくたり、しろかねこかねのついちに、こかねのとひらをたて、にはには、こんくゝるりをしき、こかねのぬさをちりはめ、せんすいのこたちは、ひかりをましへたるこゝちして、おもしろき事申はかりなし、

大りには、わしのはたかのはにて、^Bゑんしちつくり(つくり)にそふかれたり、こかねのかわらに、しろかねのゆかをならへ、にしきのきちやうをたてられたり

〈慶應乙〉 むかし、天竺にくにあり、なをはくるこくとぞ申ける、^A一天の御かどの、おろかにましますといへ共、ためしすくなくぞおはしける、あめがした、なひかぬくさきもなかりけり、だからはときにしたかひてふれり、されは、しろかねのつゐぢ、こかねのとひらをたて、みちには、こんくゝるりをのへてしき、しやくせんだんをならべて、こかねのいさごをしき、せんすいこだち、ひかりをまみ入(ママ)たる心ちして、おもしろく、内裏をは、わしのはとたかのはをもつて、^Bゑむをぞふかれたる、こかねのみかふしに、しろかねのどこをならべて、にしきの御てうをはたてたりける

冒頭の一節であるが、両本の本文には、同文に近い部分が断続して現れている。そして、傍線Aの〈慶應乙〉の文は意味が不明瞭であるが、〈反町〉を見ると、どんなに立派な王でも、どこかに欠ける所があるものだが、この王には言う所がなく、古今無類であった、の意と解することができる。これは〈慶應乙〉が〈反町〉のような文に抛りながら、言葉が足りなかったこと

に原因があつたと思われる。傍線Bの「ゑんしちつくり」は、A類諸本が皆同じでありながら、意味の不明な語である。〈慶應乙〉が単に「ゑむ」(縁)とするのは、「ゑんしちつくり」が分らなかつたためと思われ、「ゑん」が「ゑんしちつくり」に変化することは考えられない。

(例19)

〈反町〉 ひめみや、御とし十三にならせたまへは、ひかりさしそう心ちして、いつくしきかきりなし、御心はへもおとなしくて、かほうちあかめ、のたまふやう

わらはゆへにて候へは、なにをかおしませ給ふそ、まやくは十八万きの大国なり、くるこくは小こくなれば、うちとられんは一ちやうなり、みつからゆへに、くにのみたれあらん事、あさましく候へは、まやくくへゆき、大わうの御心をやめ侍(やすめ)るへし

と申給へは、大わう、けにもとやおほしけん、その御いてたちをそ、いとなみ給ふほとに、ひめみや、かくなん

なからへぬ、ちきりそいまは、あたになる、心つく(ま)まで、あふよしもかな

たらちをに、けふはわかるゝ、みちなりと、あすはゆきあ

ふ、はしとなりなん

きさき、かくなん

たまてはこ、ふたみのうらの、おきなか「ら」、なかのかけこの、はなるへきかは

ひめみや

なにとてか、ふたりのおやを、すへなから、なかのかけこの、はなれはつへき

〈慶應乙〉 ひめみやも、やうく御とし十三にならせ給ふ、

ひかりまさりて、あさひのいで給ふかとのみ、うたがはる、御よそほひ、くまなくおはしける、ちの御かど、かやうにのたまひしを、ひめみやき給ひて、御かほうちあかめて、申させ給ひけるは

みつからまかり候はすは、さためてせめられ給ふへし、さ候は、わらはかためには、ふかうにて候べし、そのうへ、くわこげんざいみらいの、しゆくごうにて候へは、にんげんのいんぐわ、これにはしめぬことにて、さればこそ、かしこき人はみな、しやうじをはなれんとさせ給候、みつから、おやとなりことなりまいらせ候も、あさからぬ事と申せども、われゆへに、かやうに物をおもはせ給ふ事、ぜん

ぜのしゆくしうとなるへし、われをさりかたくおほしめし候とも、かいなき事なり、まやこくは大こくなれば、いかでかたてあわせ給ふべき、せめられさせ給はん事、うたかひなじ、されはそのとき、みつからみまいらせ候はん心は、中くまやこくへまいりたらんより、なげきなるへし、されは、かうくにもなりはんへらん、みづからまかりなん、女ぼうたち、はした物までも、すがたありさま、じんじやうにととのへて、四十人ばかり、したて給り候へとの給ひければ、きさき、御なみたをなかけて、おふせられけるは

せめられん事はじぢやうなれとも、もろともにこそ、いかにもならぬ、ゆめくあるへからす

とおふせられるは、ひめみや、かさねて申させ給ひけるはいかて、ことほりなき事をばおふせ候そや、みづから、いまたようせうのみにて、はなれ参らせんことは、ためしなくはんへれとも、しやうじむじやうのならひ、あしたにゑいぐわをひらき候人も、ゆふへにはべつりのくもにかくれぬ、されは人のいのち、くさばのつゆ、いなづまのひかり、かせのまへのともしび、おくれさきだつならひにて、はな

れはなれかたく思しめすとも、むじやうのかぜふかは、ゆ
めならては、いかてか御らんすへき、これは、このみをか
へすく、十せんまんおうのあるじにておはしますは、日
々に御ふみおも給りて、わかみも見まいらせ候ばやと、た
かひに心はかよひなん、またよにあらば、見まいらせ候は
んすることもありぬへし、たゞしやうじのわかれとおほし
めして、いだし給へ

と申させ給へは、人々もみな、なみだをなかしける、みかど
も、けにもとおぼしめし、ともかくもおふせにこそ、したか
ひまいらせ候はんずれとて、御いてたちありけり

右は、隣国のまや国より、姫宮を差し出せとの難題を受けて、
くる国の大王が嘆く条である。〈慶應乙〉には〈反町〉の姫宮や
母後の歌は無いが、一字下げにした姫宮の言葉の部分が著しく
長くなっている。比較すると、〈反町〉のように、姫の申し出
を受けて、父王が姫を送ることを簡単に承知するよりは、〈慶
應乙〉のように、姫宮が言葉を尽して父母を説得する方が、こ
の場面には適切な叙述である。ここも、〈慶應乙〉のごとき叙
述が〈反町〉のように変化することは考えにくい。〈慶應乙〉独
自の増補と見るべきであろう。

(例20)

〔反町〕 (第一段) さるほとに、月くまなくすみほるに、まやこく
かたより、むらくも一むらひきおほひけり、ひめみや御らん
して、あはれまやこくよりうかするせいやらんとおほしめし
て、かくそのたまふ

あまつそら、くものかよひち、ふみわけて、月ならすして、
たれかゆくらん

となかめたまひて、いかなる人の、いつかたへおはしますそ
と、いとやさしく侍るくものやうかなと、のたまへは、むら
くものうちより人おりくたり、かくなん

七夕の、くものそらに、すむ水の、きみゆへいまは、お
ちまさるかな

とて、おちくる人を見たまへは、とし十七八はかりなる人な
り、御なをしのいつくしきに、くれなるのすゝしのさしぬき
に、しろきしたかさねゆゝしく、ひんつらふきなしたまひ
たるやう、たゞ人とおほへす見へさせたまひけるか、のた
まひしは、君はいかなる人にてましますは、御こゑそらのく
もまで、めてたくきこへさせたまへは、おもひのほかにあま
くたるなりと、おほせありければ

(第二段) ひめみや、のたまふやう、我はこれ、くるこくの大わうの(ママ)に、

てん大たまひめといふなり、われいかなる事にか、見る人としわかくなり、わかき人はあいきやうつくにより、まやこくの大わうきこしめして、我をむかへとり、御としわかくなりだまはんとて、御つかいあり、ちゝの大わうへ、たひくつかはされける、ちゝ大わうも、はゝきさきも、たゝ一人ある子を、いかゝつかわさるへきとて、おしませ給ふ事かきりなし、さて、まやこくの大わう、いかりをなして、そのきならは、くるこくをうちとるへし、Cまやこくは十八万きのところなり、くるこくは十一万きの所なり、いかてかたてやうへきとて、大わうもきさきもなけき給ふ、十八まんきのせいにはせめらるゝとも、みつからをはつかはすましきと侍れとも、我おやのけふやうにすゝみいたり、されとも、心くるしきたひのそら、月のいるさの山もゆかしく、なかめつるなりと、こたへ給へは

(第三段)

そのとき、あまくたり給ふ御かた、おほせけるは、われはこれ、ゆいまんこくといふ国のあるし、こんしき太子と申もの

なり

(第四段)

くるこくの大わう、ひめみや御をしみのよし、うけ給をよひ

まいらせ候、われにちきりをなしたまはゝ、ひめみやをは、

これよりくるこくへ返し、まやこくを、われ一人ゆきて、たいちしたてまつらんと、のたまへは、ひめみや御おやの御なこりをしみたまひしことをかなしみ、ふるさとへかへりたらは、さこそ大わうもきさきも、よろこひ給ふへしと、おほしめし、太子に御ちきりをむすひたまふ

(第五段)

さて太子は、まやこくのわうたいちし、くるこくのいくさをやめん事、一ちやうなり、それをいかにと申に、われ、つるきをもちたり、一すんぬけは、一千人かくひおちけり、二寸ぬき給へは、二千人かくひをつる、つるきありと、おほせらるゝ

(第六段)

さるほとに、ひめみやは太子と御ちきりあり、いつしか御なこりおし給ふ、太子まやこくへそおもむき給ふ

(太子ト姫宮トノ贈答ノ歌四首アリ)

〈慶應乙〉 (第一段) まやこくのかたより、むらさきのくも一むらひき

おゝひて、いそがしげにゆき候を御らんして、あわれまやくより、まちかねおはしまして、いかなる人の、いつかたへおはしけるぞと、の給へは、むらさきのくもさかるやうにして、おちくたりしに人あり、これを御らんずるに、廿にたら

ぬほとのおとこあり、なをしのいろいろつくしき、くれなゐの
したがさね、うすむらさきのさしぬきに、ゆゝしきさまにて、
いかなる人なれば、そののくもとばせ給ぞや、御こ多くも
のうへまですみのぼり、^Aかれうびんかとおもへば、御ことの
ねのひゝきは、ごくらくにてたふくわんといふことをくわ
んすんも、かくやおほへて、めてたくはんへれば、おもひ
のほかにあまくたりはんへると、申給へは

^(第二段)みやは、つゝましなからありし事も、こまやかにかたり給

へは

^(第三段)ふしきなることにおほしめして、みつからは、これよりにし、

ゆいまんこくのわうのひとりご、こんじきのたいしと申もの
なり、^Bこんしきと申は、みよりひかりをはなし候ゆへに、か

やうに申はんへるなり、しやうねん十九にて候と、おふせけ
る、まことにめてたき御さまにておはしける

^(第四段)ちゝのみかと百廿、はゝきさき百さいとなり給ふか、ひめみ

やの御ことうけ給はりて、いかゝしても見まいらせて、すこ
しわかくならはやと、なげき給ふあいた、みやのおふせのこ
とく、かうくともおもひて、むかへにまいりはんへるなり、
たとひ、まやこくにおはしますとも、むかへたてまつらん事

は、いとやすきことなり、これせんぜのちぎりにやとて、御
てをとりかはして、むかしいまの御ものかたりありて、あさ
からぬ御ちぎりなり

^(第五段)千よを一よとおほしけれ共、やうくどりのねもおとつれけ

れは、みやはくるこくへいそかせ給へ、みつからはまやこく
へまかりむかひて、いくさをとゝめんと、申させ給へは、み
やのおふせには、^Cまやこくは十まんくうのところなり、くる

こくは十まんごくのところなり、されは、いかてかたてあは
せたまふへきとてこそ、わがみもいでたちはんへれ、いはん
やたいしは、たゝまんきのせいにては、かたときもこらへさ
せ給へからず、されは、いかでかたいしをむなしくなしたて
まつるへき、われこそ、いかなるうきめにもあひはんへらめ、
たかひにわすれぬ御事ならば、こんじやうこそはかなくとも、
らいせにてはかならずあひまいらせ候へし、けふのわかれこ
そ、つゝあわかれとおもひはんへれと、なみたをなかし、の
給ひければ、たいしのおほせには、まことにおふせはさるこ
とにて候へとも、たゝわか申さんまゝにおはしませ、これよ
りすくに、ゆいまんこくへむかへたてまつらんすれとも、わ
らは、まやこくへまかり候はんするほとに、おもひなからに

て候、さてみやは、なに事もこのよならぬ事にて、又くるこ
くはせうこくにて候へとも、ゆゑしきくになり、まやこくよ
りまかりむかひ候とも、みやをはとりたてまつるへきにも候
はぬなり、よのつねにて候はゞ、まやこくへは、十まんきの
せいをもくそくしてこそ、むかふへけれ共、わかみは、きん
せきといふよるい、こんかうといつしいしのうはおひ、まん
きやうせんといふこてむねあて、さらにやのたつ事なし、ま
た、きんかくゑんといふかたな、しんたましゆほうといふつ
ゑあり、たんかねのいわやにはたつとも、このよろひにやた
つ事あるへからず、また此つゑは、大はんしやくなり共、す
こしもあては、くつれなん、おにまる、かなふつしといふの
みゆみ、一やに千人かくひをいとり、二やに千人かくひを
いとるなり、ひたりみきりのわきに、大とうれん、小とうれ
んといふ、二のつるきあり、一すんぬけは一千人かくひをき
り、そのうへ、ひとへのとくあり、まれにもきすをうくれは、
さらにくるしからず、たゝ十まんきのいくさにかたんこと、
かみすちきらんするは、なをさおひもありぬへし、ゆめく
くるしからず候、申さんまゝにつかせ給へと、の給へは
(第六段)
さては嬉しき事にとて、すくにかへらんとし給ふ、此事を御

ともの人々見まいらせて、ためしなきやうにそ、申あひけり、
すてによもあけなん御ありさま、むすほふれたるけしきして、
はなれかたく思しめしなから、さてあるへきならねは、いて
たち給ふ

まや国へ出立した姫宮の前に、ゆいまん国の金色太子が現れる
条である。両本の本文を便宜上五つに区切って対応させた。第
一段は、〈慶應乙〉に和歌が無いほかは、ほぼ同じ内容の叙述
であるが、傍線Aのような〈反町〉に無い語句が見える。第二
段は、〈反町〉では姫宮が、ここまでの物語を要約して経過を
語っているのを、〈慶應乙〉は「ありし事とも、こまやかにか
たり給へは」だけで済まし、著しく簡略である。第三段は、傍
線Bの金色太子の名の意味を説明する言葉が〈慶應乙〉には加
わっている。第四段は、はじめに金色太子が姫宮の前に現れた
理由を語っているが、その内容が全く違っている。〈反町〉で
は、くる国の苦衷を察して助けに来たとあるのが、〈慶應乙〉で
は、太子の父母の望みを叶えるためとしている。前者では、そ
の代償として姫宮に契りを求めるのであるが、後者では、迎え
に来たと言いながら、その場でやはり契りを結び、次の第五段
で姫をくる国へ帰しているのであって、経過に矛盾が感じられ

る。〈反町〉のごとき形を改変したためではないかと思われる。第五段は〈慶應乙〉が著しく長くなっている。前半に、姫宮がまや国を退治に行こうとする太子を止める言葉があるが、そこに〈反町〉では第二段の姫の言葉の中にあつた傍線Bの句が出ている。第二段を省略して、ここに移したのではないかと考えられる。その後の、太子が一人でもまや国を退治できるわけを述べる所では、〈反町〉は靈劍を挙げるだけであるのに対して、〈慶應乙〉は、そのほかに、鎧、石の上帯、籠手胸当、刀、杖などを加えて、不思議な力を強調している。増補したものと見るべきであろう。以上のように、この一節に関して見ると、〈慶應乙〉はA類系本文の省略できる所は省略して、独自に増補を加えたごとき観を呈している。

(例21)

〈反町〉 ひめみや、おほしけるやうは、太子は、三とせまちて、それすきなは、このよになきとおほしめせと、うけたまはり候つるに、はや三とせあまれとも、みへたまひ候はず、いかなる太子なれば、たゝかりそののちきりゆへ、はかなくならせ給らん、みつから、あたるいのちのきへやらて、物のみおもふことかなしけれとて、袖をしほらせ給ふこそいた

はしけれ、せめての事にや、花そのにたちいて給ひて、花のちるを御らんして、わか身のうへとおほしめして、かくそなかめたまふ

あさましや、よをうき風^Aに、さそはれて、花よりさきに、われそちるへき

かやうになかめたまひて、いかにならせ給ふへき御身そと、なけれけり

〈慶應乙〉 太子は、みとせまて、それすきは、此よになしとおほしめせとこそ、おふせられ候ひしか、いかなれば太しは、一夜はかりのちきりと、いのちをかへさせ給ふそや、われは、つれなくてなからへはんへるへきかと、御なけきかきりなし、なくさめにたちいてゝ、はなのこすへを御らんするに、かせ^Aにさそはるゝも、わか身におほしめししられけり、御めのも、いかゝならせ給ふへき御みそやと、いみしくなけきあり

姫宮が太子の帰りを待ち侘びる条である。ここも〈慶應乙〉に和歌の無いことのほかは、同じ内容を文章を変えて述べている趣である。そして〈慶應乙〉の傍線Aの部分は、〈反町〉の和歌を念頭に置くと、花が風に誘われて散るのを見るにつけて、

自分の命も承らえそうにない、の意と解することが出来る。へ慶應乙の本文の元に、A類系のような文があったとするのが妥当と思われる。

(例22)

へ慶應乙へ 御むまにうちのおりて、にしにこころをかけ、おはします、よるひるをかきりなく、卅三ねんのみちを十三ねんにつかせ給ひて、御らんすれは、をしへのま、そらにのほりて、山中を三七日おはしまして御らんすれは、九十はかりのらうそう、きつることく、すこしもちかわすゆきあわせ給ふ、嬉しくおほしめして、むまよりおりさせ給ひて、しかくのところを、ねかはくは、こまかにおしへさせ給ふへし、かゝるうき世になからへて、かなしきたひにまよひありき侍り候、御じひなるへしと申給へは、此そう、こはいかなる人にてわたらせ給ふそや、このみちは、うろの身なからにてわたらせ侍るそ、また、さやうのところもありと、きかせ給へるは、いかなる人の申を御き候そ、などとしてしらせ給ふそと、の給へは、ありのま申されければ、あはれなる事哉、おはしまさん事こそかたけれ、すきにしみちはかすにも侍らす、これよりにしにむかいて、七月おはしまして、やみのよ

を卅三日すぎで、たけのはやしを三日すぎで、きりのはやし六十四日おはしてのち、つるきの山とてあり、つるき、ちよりおひあかり、てんよりしたにおひたり、これをとをるには、身をもきりせむる事、しやばにていくさをして、きりつかれんを、あらゆるまんあわせたるくるしみなるへし、さても太子は、おはしますところも、めてたきところなり、また、しんある人なれば、ごひはほたひのはしめなれば、さのみは、よもくるしみをはしまさし、このみちを三日おわしまして、ひの山とて、おひたしきひ、もへ候はんするおは、せうねつ、大せうねつ、くなくと、つねにくわんしてこへ給へ

ここは六五頁の(例15)に挙げた、A類本に共通する脱文の個所である。これを(例15)のへ名古屋の文と比較すると、文章にはかなりの違いがあり、へ慶應乙へ独自の部分も見られるが、叙述の運びは両本の間でほぼ対応して進められている。従つてへ慶應乙へはへ名古屋と共に、A類系の、脱文を生じる以前の本と関係をもつと考えて良いであろう。

(例23)

へ反町へ (一) さてもひめみやは、大ほんわうにまいり申給ふやう、しやはにてちきりし、ゆいまんこくのこんしき太子、これま

てたつねきたり給ひ候、ありし(事とも)ことも、こまやかにかたり申
させたまへは

(二)大ほうわうも、くはしくきこしめして、あはれとおほしめし、
むかしより、こひする人おほしといへとも、うろのみながら、
これまでたつねてきたれる事、さらになし、これまでたつね
きたれる人を、かへすへきにもあらず

(三)こかねのつゝいの水にてみすすぎ、あまのはころもをきせ
て、くしてまいれと、の給へは

(四)ひめみや大きによるこひ、此よし申させ給へは、たいし、う
れしくありかたくおほしめして、こかねのつゝ井の水をあひ、
あまのは衣をめし給ひて、(まいり給へは)御らんすれば

(五)大ほんわうは、まことにさうかうけたかくおはしまし、たま
のかぶりあさやかにして、こかねのゆかのうへに、こさをし
きてさし給へり、太子は、ゆかより下のさにおはしませは、
ゆかのうへへひきあげ給ひ

(六)太子をつくくと御らんして、しひの御まなこより、御なみ
たをなかし給ひて

(七)いかなる人にていらせ給ふそと、とはせ給へは、われはゆい
まんこくのものなり、姫みやゆへに、これまでたつねまいり

たりと、申させ給へは、大ほんわう、のたまふやう、ひめみ
やは、もとよりこの国の人なり、かりに人けんむまれたり、
によいほうしゆとは、この女人の事なり、太子にふかきちき
りありて、かたしけなくも、このもとにむまれながら、また
あふ事をゑたり、女人のみをあらためて、ほさつのくらいに
のほるへき人なれとも、太子にこゝろさしふかきゆへに、い
また天女のくらいにておはします

(八)太子は、いまたうろの御身なれば、これはおはしまし候へき
にあらず、これよりひんかしに、ふくとく山といふやまあり、
なに事もこれにおとらず、たのしみさかへたる所なり、その
山へおはしまして、ひしやもんでんわうとあらはれ給ひて、

一さいしゆしやうをみちひき給へ、ひめみやは、きちしやう
天女とあらはれたまひて、ひしやもんのかたはらにおはしま
(ま)して、たへぬちきりをむすひたまへ、ひしやもんでんわうとあ
らはれて、よろつの人のふくをねかはんときは、此はこのふ
たをあげ給ふへしとて、三つあるはこのなかに、すこしちい
さきをとりいたし、太子にたてまつり給ふ、一さいしゆしや
うのねかはん時は、これをまきたまへと、おほせければ、ひ
めみやも太子も、よろこひ給ふ事かきりなし

(十) さて、ふくとく山におはしまして御らんすれば、しろかねこかねをちりはめて、こたちいつくしく、くうてんろうかくちうくにして、十はうしやうともかくやとおほへて、めてたかりける

(十一) さて、此やまのぬしになりたまひて、ひしやもんでんわうとあらわれ給ふ、姫宮は、きちしやうてん女とあらはれ給ひ、一さいしゆしやうのねかひをみてたまへり、四わふてんのうしとらのはうに、ひしやもんでんわうとは、此御事なり

(十二) さて、たいしのちゝ大わうは、三百五十さいをたまち給ひて、ふけんほさつとあらはれ給ふ

(十三) くるこくの大わうは、五百さいをたまちて、あくまかうふくとあらわれたまふ、はゝきさきは、やうりうくはんおんとあらはれ給ふ

(十四) まやこくの大わうは、三百さいをたまちて、せいしほさつとあらはれ給ふ

(十五) 太子の、まやこくにての千人のきさきは、みなほしのことくにあらはれ給ふ

(十六) いたつれもたゝ人にてはおはします、かゝるたつときほさつとあらはれ給ふ、一さいしゆじやうのほとけとあらはれ給ひ、

ほんふをすくはんためなり、ありかたきとも申もおろかなり
(一) 慶應乙 此よし申されければ

(二) さらは、かの人を、こかねのつゝゐのみつをあびせて、あまのはころもをきせまいらせて、これへくし給へと、おほせありければ

(三) たまひめよろこひて、いそきかへらせ給て、太子の御ころもをぬかせまいらせ候て、こかねのつゝゐのみつをあびせ申て、あまのはころもめさせて、くしてまいり給ふ

(四) 大はんわう、もろくあわれなる事にこそ侍れ、これまたたつねきたり給ふ人をは、いかてかむなくかへし申へきとて、御なみたをなかさせ給ひて、おふせらるゝやう

(五) 太子、いまたほんぶにて侍れば、これにおはしますまじき人なり、これよりうしとらに、ふくとくさんとて山てらありければ、おはして、一さいしゆじやうの、ねかひをみて給へと

(六) て、こかねのはこ三ある中に、ちいさきはこをとり出し給ひて、よものしゆしやうの、ふくとくねかはん、あたへ給へとて、ひしやもんでんわうとなりておはしませ、たまひめは、

あさゆふ御身をはなれすして、きちしやうてん女といはれ給て、こひをせんものに、ねかひをみて給ふへし

(九) 太子をこれまでおくりたてまつる、むまなれとて、こくらく

のりうのこまとて、ばとうくわんおんのけしんとなりけり
(十) さても、人けんAにちきりふかくましますさん、のちのよまでも、

たつねおはしまして、浅からぬ御心さしせつなるによりて、

ふくとくさんを給りておはします、御らんすれば、うつくし

き山でらなり、いとめてたきところなり

(十一) 太子は、しゆしやうのねがひによりて、ふくとくをあたへ給

へり、みやは、きちじやうてん女とておはします

(十二) 太子のちゝ大わうは、千じゆくわんおんとあらはしにて候、

きさきは、せひしほさつとあらわれまします

(十四) まやこくの大わうは、しる(ママ)へきゑんにより、大しやうふどう

みやうわうとあらはれ給ひぬ

(十六) されは、こひせん人は、だうしんふかくして、ほとけをねん

し、哥をよめは、かならすほとけをやすくして、わうしやう

のもとひとなるへし

この条は物語の終りの部分である。本文の長さが、〈慶應乙〉は〈反町〉の半分程度に短い。叙述内容を対照しながら区切りをつけると、右のように、第二・五・七・十三・十五段が〈慶應乙〉には欠け、第一段は、〈反町〉の叙述内容を〈慶應乙〉は

「此よし」の一語で済ませている。両者を見くらべると、物語の叙述としては、〈反町〉の方が整っているように感じられる。たとえば〈慶應乙〉の第十段の傍線Aの部分は文意が明瞭でないが、〈反町〉には対応する文がない。これは〈反町〉の第七段を省略し、それに代えて、この一文を挿入したのではないかと思われる。また、第十一段以降は、物語中の人物の垂迹を述べる本地物としての結びの部分であるが、そこが〈慶應乙〉で簡略になっているのは、やはり新たな省略と考えるべきであろう。

ただ〈慶應乙〉の方にだけ見える、第九段の龍馬に関する記事は、前述のごとくB類の〈名古屋〉には出ている(六五頁例16参照)。〈反町〉以下のA類本の脱文と考えられる個所であるが、A類本と直接的な関係の見られるのは〈名古屋〉であって、〈慶應乙〉は〈名古屋〉とは関係があるが、A類とは直接に関わっていないことがわかる。

以上によって、C類の〈慶應乙〉は、A類とは非常に大きな相違が見られるが、A類より古い形態と言える本文ではないとして良いであろう。そして、A類諸本に共通の脱文個所に相当する部分を有することと、B類の〈名古屋〉と通じる記事を有することからすると、〈慶應乙〉はB類系の本文に拠りながら、

和歌を全部省略すると共に、叙述に大きな改変を加えて本文を作った本であろうと判定される。

最後のD類（刊本）は、諸本の中で最も変った所の多い特異な伝本である。本書の本文は、全篇にわたって七五調を基調とした文章によって綴られていて、語り物の調子を帯びている。

このことについて、横山重氏は「室町時代物語集第二」の本書の解題の中で、

「御みはほんぶのみとし。てにかなひがたく候なり」とある、てといふ変体仮名は、天とも読み得るのであるが、自分等は、今「みとしてに」と続けて読んでおいた。かういふ語法は、古い説経節などの語り物には、をりく見える語法のやうである。それに、字として見ても、前後にあるての字や、又、天の字と比較して見ると、やはり仮名のての字に近いやうに見える。

と述べられ、さらに、「古浄瑠璃正本集第二」の、伊勢嶋宮内の正本「ふきあげひてひら入」の解題でも、この正本に見える「ひて平聞て、まつくきみへまいりてに、給はれかしと申ける」のてについて、

かういふ語法は、太夫の個人的な癖では、勿論ない。国のなまりか、又は集団のなまりか、とにかく、古い語法らしい。かういふ語法は、古浄瑠璃にもあるが、説経節に多くあった。どちらも、古い正本に限るやうだ。そこで、今にして思ふのであるが、室町時代物語集第二冊の三十番に掲出した「毘沙門天王之本地」も、説経又は、古浄瑠璃の本文から取つてゐるのではあるまいか。と言われた。

また、信多純一氏も、右の横山氏の説を承けて、「説経正本集第三」の天満八太夫正本「毘沙門之本地」の解題において、本書（承応板の草子）が、説経の正本の四段目までとほぼ一致すること、地の文章だけで展開して行くのではなく、適当に人物の科白の利用があること、六段の段分けのあつた痕跡が見えること等によつて、古い語り物の系統を引くものであることは、疑いがないとされた。そして、その古い語り物が、説経か、古浄瑠璃かという問題についても、本書の冒頭に「ひじやもんでんわうのゆらひを、くわしくたづぬるに」とあるのは、古説経特有の冒頭句と同じであることを以て、説経であろうと推定されている。

このように、既述のABC三類の諸本を草子系とすれば、D類の〈刊本〉は、語り物系と言うべき性格を備えていることが明らかにされているが、この〈刊本〉は、文章だけでなく、物語の大筋は変らないものの、部分部分の叙述に非常に大きな相違が見られる。次に、主な箇所を挙げてみる。

(1)くる国の大王が申子をする条 AC二類は、梵天王に詣でて祈願をするが、〈刊本〉は、大梵天王宮を内侍所に勧請したとある。また、梵天王の示現に、ACは、大王と後の前生が語られるのに対し、〈刊本〉は、大王の前生だけである。

(2)くる国の姫宮が、国を救うために、まや国へ赴く条 A類は、別れに際して、姫宮の歌三首と、母後の歌一首を載せる。〈刊本〉は、母後の歌一首だけである。その一首は類似している。また、出立して七日目に宿をとった場所を、〈刊本〉は「このけのぶ」とする。これは、A類の「しのふ」と異なり、C類と同じである。しかし、この所で姫宮が月を詠めて歌をよむことは、A類と一致する。

(3)姫宮の前に、金色太子が雲に乗って天下る条 A類の、姫宮と太子がよむ歌二首は〈刊本〉にない。太子が姫宮の前に現れた理由を、〈刊本〉は、

ちゝのみかとは百さいになり給ふ、はゝのきさきは八十さいになり給ふか、御みの御事、かせのたよりにきこしめし、むかへてまいれと、のたまふゆへ、これまてまひりて候なり、いそぎ、ゆいまんこくへ御こし候へ
と語る。これはA類とは異なり、C類と一致する(七一頁、例20参照)。なお、この条の〈刊本〉の叙述は、ACよりも著しく短い。

(4)姫宮はくる国へ、太子はまや国へと、別れを告げる条 A類には六首の歌があるが、〈刊本〉は二首で、それも別の歌になっている。この条で、A類とC類の間での大きな違いは、(例20)の第五段にある、太子の持つ不思議な武器であるが、〈刊本〉は次のようになっていて、C類に近い。

それかしかいへにつたはるたからには、きんせきおどしのよろひに、こんがうのかぶとをき。まんきやうせんのすねあてし。かたきにむかふものならば、やのたつことはさらになし、しゅほうと申せしつゑをもち、大きな山なりとも、ひとうちうては、かたきのかたへくすれける、まづ、かなふしといふゆみは、ひとたびはなせは、千人やさきにかゝる也、たいとうれんせんすまるといふたちは、ひとふりふれは、せん人

のそのくひか、一とにはらりとおつるなり

右のように、大とうれん・小とうれん、という剣だけを挙げるA類とは違って、C類と似通っている。

(5) 太子がまや国を制圧する条 A類やC類は、太子とまや国の大王との問答の中で、太子は、小が大にまさる例を、大王は、大が小にまさる例を挙げるが、〈刊本〉には、そのような記事がない。また、太子がまや国の軍勢を相手に戦う場面の語り口も、〈刊本〉は、A C類とは異なって、古浄瑠璃風の詞章になっている。次に、まや国の大王が降参して後、A C類では、太子はまや国に引き留められ、千人の妃にかしずかれて三年を過すとあるが、〈刊本〉では、太子は父母の待つゆいまん国へ帰ったとある。これは、くる国の姫宮と、三年後の再会を固く誓って別れた太子が、まや国で漫然と日を過したというA C類の語り方が不合理なので、これを改変したのではなからうか。その所の〈刊本〉の文は、左のようになっていた。

太子をほしめすやうは、ゆいまんこくへかへらんか、くるこくへゆきつゝ、まづひめにあはんかとて、二のあしふんてみえけるか、百さいにおよひたる、ちゝはゝもちたることなれば、たゞひとりのみづからを、さぞやまたせ給ふらん、まつ

くこきやうへかへらんと、こんでんこまにうちのりて、ゆいまんこくにぞかへられける

(6) 姫宮が太子の帰りを待ち侘び、ついにはかなくなる条
ここは、六六頁の(例17)に挙げたように、A類とB C類との間で、叙述に顕著な相違のある箇所である。A類は、姫宮が太子の身を案じつつ、和歌(四首)をよんで嘆き暮したとするだけであるが、B C類では、太子の絵姿を見て心を慰めたという記事がある。そして、B類には、やはり姫宮の和歌が四首出ているが、A類と共通するのは二首だけである。〈刊本〉は、A類とも、B C類とも違い、次のような特徴のある叙述になっている。

姫君が空を眺めていると、東の空に観音・勢至が現れて音楽を奏し、西の空に童子の姿が現れて舞い遊ぶ。姫君が玉の手箱に寄りかかって、これを見ていると、手箱の中で人の泣く声が聞える。不思議に思い、開いてみると、中の鏡に太子の姿が映っていた。父母や女房たちも、これを見て驚く。姫は、これは太子がまや国で討死して、浄土へ往った知らせと、いよいよ嘆きを深くした。

このように、独自の趣向を構えているが、鏡の中に太子の姿を

見るというのは、BC類の絵姿と一脈通じる所が感じられる。また、〈刊本〉には、姫宮のよんだ歌を一首だけ載せているが、それは

あさがほの、いろはかなきと、おもひけん、はなよりさきに、
きゆるものうき

とある。これに当る歌は、A類とB類には、次のように出ている。

あさかほを、はにはかなしと、おもふらん、花よりさきに、
われそちるへき (A類)

あさかほを、なにはかなしと、おもひけん、花よりさきに、
きゆるしら露 (B類)

似通った歌ではあるが、傍線の第三句と第五句とは、どちらかと言えばB類の歌に近いと言って良いと思われる。

(7) 三年過ぎて太子はくる国へ行き、姫宮の死を知る条 A
C両類には、太子の夢に姫が現れ、恨み言をいうのに驚いて、くる国へ赴いたとあるが、〈刊本〉には、この記事が無い。その他は、ほぼ同じ内容であるが、A類にある五首の歌は〈刊本〉には無い。

(8) 太子が姫宮の夢の告げにまかせ、こんてい駒に乗り、天

空に昇って、大梵王宮に生れ替った姫宮を尋ねる条 〈刊本〉は、この部分が著しく簡略である。〈刊本〉は全体の本文の長さも、AC類諸本の三分の二弱と短い。前条までと、この条以降の本文の割合を見ると、AC両類では二対一位であるのが、〈刊本〉では三対一位になっている。この天空の遍歴では、太子が道々で会う星や菩薩に大梵王宮への道を尋ねて行くのであるが、AC両類では、

① ゆふつつ星 (けうやう菩薩) ② 産星 ③ 七夕 ④ 七しや
うの星 (四三の星) ⑤ 明星 (虚空蔵菩薩) ⑥ 月光菩薩 (大
勢至菩薩) ⑦ 日光菩薩 (観世音菩薩) ⑧ 地藏菩薩

となっている。〈刊本〉に欠けているのは、⑥⑦だけであるが、AC両類では、⑧の地藏菩薩の教えの部分が非常に長い。そこには、三途の川と思われる大河や、上中下の三品往生の橋、奪衣の鬼神、橋慢地獄などの様が語られているが、〈刊本〉では、それらが無く、

ぢぞうぼさつはきこしめし、そのぎならはをしへ申さん、かたしけなくも、大くうと申は、此みちはるかにゆかせたまはよ、あまたのみちあり、なかにも、くさのはへみちて、ものさひしきみちあらは、そのほうへゆき給へ、あまたの人のた

ちいで、こなたへとむるとも、そのかたへはむやくなり、なかにも、みめよき上らうのたちいで、とむるとも、かまへてゆかせたまふなよ、みなくげどうのともから也、そのみちはるかにゆかせ給へや、それよりちかく候ぞ、わかき人とのたまひて、おしへて、とをらせたまひける

というように、非常に簡略化されている。しかし、A類本に共通するやや長い脱文の箇所(④と⑤の間)を、〈刊本〉は簡略ながら備えている。また、④の「七しやうの星(七曜の星イ)」「(A類)を、C類は「四三しきうの星」とするが、〈刊本〉も「しそうのほし」とあって、C類に近い。その他、〈刊本〉のこの条にはC類と同じく和歌が一首もないが(A類は八首)、B類の〈名古屋〉も、横山氏の解題によれば、終りの方(おそらく、天空遍歴の部分であろう)には和歌が少ないとある。

(9) 太子と姫宮と再会の条 A C類は、大梵王宮に着いた太子が、黄金の筒井の側にある梅檀の木に登って待っていると、姫宮が水を汲みに現れ、井の水面に太子の姿が映っているのを見て驚くというように、彦火火出見尊の海宮行説話の型を借りているが、〈刊本〉は、

太子、此よし御らんして、つゝいのみつは、いつくのほとに

てあるらんと、かなたこなたを見たまへは、つゝいのみつの見えけるを、するくとはしりより、こゝかしこを見たまへは、やうらくをみにまとい、まことにゆゝしき御ありさまにて、ひめきみ、をくよりいてさせたまひて、たかいにめとめをみあわせ、これはくとはかりなり

とあって、特別の趣向がなく、その後の、太子と姫宮との問答も、A C類よりはるかに簡略である。

(10) 垂迹の条 ここも〈刊本〉は著しく簡単である。七六頁の(例23)に掲げたA C両類に当る〈刊本〉の本文は、

このよし、うかゝい申さんと、いそきをくへはしりいり、ほとけの御まへにて、此よしかくと有ければ、ほとけ、此よしきこしめし、一やのちきりにはかなくも、是またたつねきたる事、ためしすくなきしたいなり、ほんのうといふはほたい也、こひといふはぶつしゆなり、くるしからぬ事なれば、つゝいのみづをあげせつゝ、しやばのすがたをひきかへて、つれてまいれと、の給えは、ひめきみ、なのめにおほしめし、たいしにみつをかけ給ひ、しやはのすかたをひきかへて、てにてをとりて、ほとけのおまへにいてられける

ほとけ、このよし御らんして、さてくなんちは、一やのち

きりにはかなくも、是までたつねきたる事、ためしすくなき
したいなり、なんしはこれより、しやばにかへりて、しゆし
やうをさいとあるへしと、こかねのはこを給りけり、いまよ
りのちは御みかなを、ひしやもんでんと、なをつきて、これ
よりいぬいにあたりて、ふくとくの山あれば、其山のぬしと
なり、ふくとく、しゆじやうにあたふへし、をなくひめも
ひきぐして、きちぢやうてん女と、なをつきて、こひぢのみ
ちをかなふへし、兩人いかにと有ければ

うけたまはると申て、はやつうりきぢさいのみとなりて、せ
つなかあいたに、しやばにかへらせ給ひて、かの山にわけい
りて、くらまのやまとなつけつゝ、しゆしやうをさいどした
まいけり

のようになつていて、太子と姫宮以外の人物についての垂迹の
記事が無い。ただ、AC類では、太子と姫宮は、大梵王から福
徳山を与えられ、そこに住んだとあるのを、〈刊本〉は、傍線
のように、その福德山は娑婆世界にあって、それを鞍馬山と名
づけたとする。つまり、鞍馬の毘沙門天・吉祥天女の本地物語
に仕立てているのが特徴である。

さて、以上のように、D類の〈刊本〉は、ABC類の写本諸

本に対して、叙述内容においても顕著な特徴の見られる伝本で
ある。室町時代物語の類にあっては、江戸時代に刊本が出版さ
れている場合、その系統の本文が流布している例が多いのであ
るが、この承応版「毘沙門天王之本地」と同系の本文を有する
写本は、今までのところ見ていない。このことも、本書の特異
性と関係があるのかもしれない。ところで、この〈刊本〉と、
ABC類の写本との関係について見ると、上記のごとく、A類
とは関係が薄く、BC類とは所々に類似のあることが認められ
る。ただし、C類は和歌を全部省略した伝本であるのに対し、
〈刊本〉には、数は少ないが和歌が残っている所から見ても、
C類と直接の交渉のあったことは考えられない。おそらく、全
体としてはA類の祖本に近い形でありながら、部分的にC類と
共通する所をもつ、B類系統の本から、〈刊本〉の本文は成立
したのではないかと推測される。しかし、B類系本文の全貌が
明らかでないので、あくまでも臆測にとどまることである。

次に、この〈刊本〉については、前記の信多純一氏の論考に
ある、説経との関係が問題である。本作の説経正本としては、
左の諸本が知られている。

(一) 毘沙門之本地 「天満八大夫」 正本 六段 「宝永八年」う

ろこかたや刊 中一冊 岩瀬文庫蔵

(二) 毘沙門之本地 天満八太夫正本 六段 「正徳」うろこが
たや刊 中一冊 (有欠) 慶應義塾図書館蔵

(三) 毘沙門之本地 六段 「宝永」うろこかたや孫兵衛刊 半
一冊 東京女子大学図書館蔵

(一) は、刊記に「卯正月吉日 うろこかたや 新版」とあるが、
これは「貞享丁卯」の原刻本を「宝永辛卯」に複製したものと
推定されている(説経正本集第三解題)。本文に関して言えば、
(一) は全く同文、(三) は六段目の末に、やや長文にわたる異文個
所がある。

右の説経正本と〈刊本〉とを比較すると、正本の五段目のは
じめ、姫宮が太子の夢枕に立ち、筒井の浄土へ尋ね来れと告げ
る条までは、正本は〈刊本〉とほぼ同じ筋で運んでいる。〈刊
本〉より省略された部分も多いが、詞章がほとんど同文の個所
も随所に見られる。正本に出ている三首の和歌も、〈刊本〉と
同じで、内二首は〈刊本〉特有の歌である。従って、〈刊本〉
と正本とが、きわめて近い関係にあることは明らかである。お
そらく正本は、〈刊本〉のような内容の古い正本にもとづいて、
適宜に省略と改変を加えながら、本文を作ったのではないか。

たとえば、金色太子のもつ不思議な武器について、正本は

我ら家のでうほうに、きんせきおとしの大よろい、こんがふ
のかぶとをき、かたきに向て、矢のたつ事候はし、大とうれ
んと言太刀を、一ふりふれは、一度に千人のくびおつる也、
かたきいか程有とても、いかてか打れ申へき

と述べるが、その後の、太子がまや国の軍勢に立ち向う条では、
太子、由を御らんして、馬につけ置ものゝくを、一々に取出
し、やがてしやうぞくなされつゝ、しゆほうといへるつえを
つき、大りをさしてぞ入給ふ

とあって、前の所には無かった「しゆほうといへる杖」が出て
くる。この杖は〈刊本〉には、前条にも出ている所を見ると、
正本は、前条では〈刊本〉のような叙述を簡略化しながら、後
ではそれを忘れて、省略した「しゆほうの杖」を出すという矛
盾を犯したのである。

ところが、正本の五段目、太子が、こんてい駒に乗って出で
立つ所からは、次のように〈刊本〉とは内容が著しく異なっ
てくる。

太子は渺々とした広野に出る。大木の下に妖しい姥が大石に
腰かけている。姥は、引き出されてくる罪人を、一人一人罪

を糺して地獄へ送る。太子は、姥に浄土への道を教わり、大河を渡ると、河原で幼い子をいつくしんでいる地藏菩薩に会う。地藏に尋ねて山路へかかり、七曜の教えで天の河に着く。七夕・彦星に会って天の河を渡り、さらに数多の僧に教えられて、ついに筒井の浄土へ到る。

このように、〈刊本〉では省略されていた地獄の様が、簡単ではあるが、また復活している。しかし、遍歴の間で道を教えられる順序は、八三頁に記載した草子系写本のそれとは逆になっている。そして、太子が姫宮と再会する条も、

太子が柵檀の木の本に駒をとめ、休んでいる所に、姫宮が天人と共に現れ、前の池に来て水を汲もうとすると、水面に太子の姿が映り、夢かと驚く。

となっていて、草子系写本の内容に戻っているのである。このように、正本の第五・六段は〈刊本〉から離れているのであるが、このことについて、信多純一氏は次のように述べられている。

かういふ所を併せ考へると、八大夫の正本は、承応板の草子系の本文によって、四段目までを作り、五六段の部分は、お伽草子系の読み本を参照して、かなり工夫して、改作してゐる。

るやうに考えられる。もしさうでないとすると、承応の草子の拠った語り物とは別に、八大夫の正本の系統に近い本文をもった語り物が、別に他にあつて、八大夫は、それによつたと考へざるを得ない。

私も、右の信多氏の説に同感である。正本の五・六段に関しても、正本の形から〈刊本〉への変化は考えにくい。いずれにせよ、〈刊本〉は、現存の説経正本につらなる語り物系の古形を示すものと思う。

そういう前提に立つて、正本の五・六段に当る、太子の遍歴から姫宮との再会のくだりに関して、ABC類諸本から〈刊本〉へ、〈刊本〉から正本への、本文改作の経緯を推測してみる。

〈刊本〉が、この部分を思い切つて縮めているのは、説経としての六段構成に収める必要があつたからではないか。正本の五・六段は、〈刊本〉三巻のうちの、ちょうど下巻に相当する。その下巻の中間に、

おいとま申てさらはとて、なみだとゞもにひきわかれ、ゆくゑもしらぬしらはまを、たとろくともよはせたまふ、ころのうちのあはれさを、たとへていふへきかたもなし

〔挿絵 第十四回〕

そのうち太子は、いそがせ給ひてみ給へは、をしへすこしも
たがはずして、さきよりも、いかにもたつとき御そうの、七
八人みえたまふ

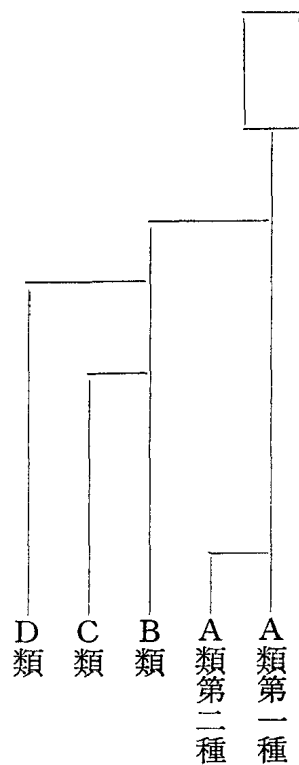
という個所がある。挿絵をはさんで、段分けがあったと考えて
良いであろう。A C類の諸本では、〈刊本〉の下巻に当る部分
は、上中巻に当る部分よりも、さらに長いくらいの分量がある。
上中巻で四段分を費してしまつと、五・六段はよほど節略しな
ければならなくなる。そのために〈刊本〉は、地藏菩薩の道し
るべの言葉に出てくる地獄の光景を主として省略したのである
が、それは、それまでにいろいろの星が出てくる天界の遍歴の
末に、地獄が出てくるということに、不自然を感じたからでは
なかったか。しかし、この種の地獄に関する話は、本地物のよ
うな唱導の目的をもった物語には、捨てがたいものである。そ
こで、現存正本は、再びこれを復活したのであるが、上記のよ
うな不自然さを解消するために、道順を逆にして、地獄を一番
先に出してきたのではないか。正本は、金色太子が遍歴に出る
最初を、

こんていこまにうちのりて、御めをふさき、むちをあて、行
へもしらす出給ふ、しはらく有て、めをひらき、四ほうをき

つと見給へば、たへうくたるひろきのに、出させ給ふそ
ふしき也

と述べていて、A C類の草子のように、はじめから空に昇つた
とはしていない。そして、地獄を過ぎ、三途の川で地藏菩薩に
会つてから、山路にかかり、はるかに登つて天の河に着くとい
うように、いわば合理的な順序になっているのである。

以上で、「毘沙門の本地」の現存伝本に関する考察を終る。
最後に、A B C D四類の関係を総合して図示すれば、次のよう
にならう。



本作の原型に最も近いのがA類、それに部分的な改変を加えた
のがB類、B類系から、さらに派生したのがC類とD類で、と
くにD類は、説経系の語り物に仕立てるために、大きな改作を
施した本ということになる。

本作は、毘沙門天・吉祥天の前生を語る本地物語である。本作の諸本のうち、古い説経節の本文に拠ったと思われる、承応三年版「毘沙門天王之本地」は、巻頭では、

ひしやもんでんわうのゆらひを、くわしくたづぬるに

と説き起すが、巻末では、

はや、つうりきぢさいのみとなりて、せつなかあいたに、しやばにかへらせ給ひて、かの山にわけいりて、くらまのやまとなつつけつ、しゆしやうをさいどしたまいけり

として、鞍馬山に垂迹をしたと述べている。さらに、現存の天満八太夫系の説経正本になると、冒頭にも、

そもく、らくやう、くらまの寺に立給ふ、びしやもん天王のゆらひを、くわしく尋るに

とあって、鞍馬寺の毘沙門天の本地であることを、はっきりと打ち出している。しかし、草子系の諸本にあっては、鞍馬の名を全く出していない。上述のごとく、草子系の方が本作の古体を伝えることが明らかであるから、本来は「阿弥陀の本地」と同じく、特定の寺院に祀られる毘沙門天を対象にした本地物語ではなかったであろう。

本作も「阿弥陀の本地」における「大乘毘沙門経」のように、

物語構成の材料となった説話が何かあったのかもしれないが、今は明らかにすることができない。萩野由之氏は「新編御伽草子」の解題において、

この草子の趣は仏経を種として、小説に作れるものなるべけれども、其出典は知らず。祖庭事苑に、贊寧が僧史を引き、唐の天宝元年西蕃の五国安西に来寇せし時、玄宗不空三蔵に詔して、仁王護国陀羅尼を持咒せしめしに、毘沙門天王第二の子独健、形を現じ、神人五百員ばかり、金甲を被て安西を救ひ、蕃寇を打ち退けし事を記せり。これなどやこの本拠ならんか。

と記され、また、津田左右吉氏は「文学に現はれたる国民思想の研究―武士文学の時代」の中で、

毘沙門の本地の女主人公は瞿婁国の王姫となつてゐるが、瞿婁国がマハアバラタの物語の産まれたところであることはいふまでもあるまい（但し物語の筋はマハアバラタとは関係が無いやうである）。さうしてこの姫君と契を結んだ維曼国の金色太子が、兜率の内院に上つて一度び失つた姫と再会するといふのは、ツシヤンタ王がシヤクンタラ姫と韃陀婆の山上に於いて再会した話を想ひ出させる。これらは勿論、インド

の史詩や戯曲と直接の関係のあるものではなからうが、イン
ド人の間に広く行はれてゐたそれらの物語、もしくはそれに
類似したものが、形を変へて仏教の經典の何かに採りこまれ
てゐたのではあるまいか。

と述べられている。「祖庭事苑」に引かれる話は、類似がごく
部分的なものに過ぎないし、津田氏の説も推測の域を出ない。

この本地物語は、毘沙門天や吉祥天女の前生にふさわしく、
密教における天部の信仰によつて彩られているのが特徴である。
冒頭の申し子の条では、瞿婁国の大王は梵王に祈請したとある。
A類本は「ほんほう」「ほんほう」「まんほう」「御方」などと書
き、意味を解しかねた様子が窺えるが、C類本には「ほんでん
わう」、D類本には「だいぼん天わうぐう」とあるのをみても、
梵王の意であつたのであろう。梵王は梵天王とも言い、色界初
禅天の主とされる。もとは婆羅門教において造物主とされる神
であつたが、仏教に入つて、帝釈天と共に仏法の守護神となり、
とくに密教において尊崇されていた。申し子は、この種の物語
には通例のことで、本作のその場面の叙述も典型的であるが、
祈請の対象を梵天とするのは異例である。

次に瞿婁国の天大玉姫の危難を救うために、維縵国の金色太

子が現れる所も、初秋の月がくまなく照らす空から雲に乗つて
天下るといふ趣向を構えている。「梵天国」の場合と男女の関
係が逆であるが、太子もまた、梵天から天下つた天人であつた
ことを思わせる語り方である。

さらに、この物語で最も力を入れて語っているのは、大梵王
宮の黄金の筒井という所に生れ変つた姫宮を、金色太子がこん
でい駒に乗つて尋ねてゆく後半の部分である。龍馬に鞭を当て
て空に昇り、西へ向つて三年飛び続けると、高い山に着く。そ
れより山路を辿るうち、次々に出逢う僧体の者に、大梵王宮へ
の道を問ひながら先へ進む。その僧体は、A類本によれば、
ゆふづつ星（一切衆生を孝養菩薩）

彦星

七夕

七星（CD類「四三の星」）

明星（虚空蔵菩薩）

月光菩薩（大勢至菩薩）

日光菩薩（觀世音菩薩）

地藏菩薩

となつてゐる。ゆふづつは金曜（太白星）のこと、七星は北斗

七星、明星は虚空蔵菩薩の化現である明星天子、月光・日光も、勢至・観音二菩薩の化現とされている所を見ると、月天子・日天子のことである。これらは、いずれも密教における修法の対象となる諸天である。

津田左右吉氏が前掲書の中で指摘されていることであるが、室町時代に広く流布した「融通念仏縁起絵巻」で、大原良忍上人が鞍馬寺へ参詣した時、毘沙門天が化現して、上人の念仏に結縁した冥衆の名帳を奉呈することがある。その名帳の中に、北斗七星・日天子・月天子・明星天子等の名が見え、さらに画図にも、飛行する念仏結縁の諸天の姿が描かれている。その構図は諸本によりやや異なるが、フリア美術館本を見ると、まず上方に梵天、その左右に日天子・月天子が居り、下方に七星・九曜が描かれ、その先に、名帳を捧げる多聞天（毘沙門天）や、吉祥天の姿がある。「毘沙門の本地」に登場する諸天が揃っているが、さらに、その先には冥土の十王も並んでいる。地藏菩薩の姿は見えないが、この画面は、金色太子の天界遍歴の次第の背景を物語っているように思われる。「融通念仏縁起」のこの場面の主役が、鞍馬の毘沙門天であることを考えると、まずまず「毘沙門の本地」との関係が近接してくることを感じるが、

それはともかくとしても、この本地物語は密教の天部信仰の上に成立したと言えるであろう。

その他の点でも、本作の物語としての筋立は、毘沙門天と吉祥天女の本地に洵にふさわしく作られている。吉祥天は毘沙門天の妹とも妃とも言われるが、密教では、吉祥天女を胎蔵界大日の所変とし、金剛界大日の所変たる毘沙門天王の妃と説いている（大日経疏）。その本地に、梵天王から下された瞿婁国の姫宮を設定し、姫と二世の契りを交しながら、今生で添い遂げられなかった金色太子が、天界遍歴の難事業の末に、大梵王宮で再会するという全体の構想自体も、二天の信仰上の関係を踏まえて、うまく出来ていると言えよう。さらに、「覚禪鈔」等に記す毘沙門天の形相は、身色黄金にして甲冑を帯すとある。金色太子の名はそれと関係があらうし、姫のために摩耶国を一人で退治するというのも、毘沙門天の軍神としての信仰についての趣向であろう。一方、姫宮が絶世の美女というだけでなく、見る者を若やがせ、延命長寿の福を与えたというのも、福神としての吉祥天と頭れる人物なればこそである。

本地物には、物語の内容と、本地の対象とした神仏等との間に、あまり必然性がなく、他の神仏の本地に転用しても通るよ

うな作品も少なくないが、その点では、右のように本作は意図的に物語が構成されている。しかし、本地物に共通する、男女主人公の現世における苦難という主題に関しては、深刻さがあまり感じられない。同類の「阿弥陀の本地」などにくらべても、読者の涙を誘うような悲哀感が稀薄である。前述のごとく、本作は古説経としても行なわれていたと思われるが、「さんせう太夫」「しんとく丸」「をぐり」「かるかや」「愛護の若」など、古説経の代表的作品に纏綿する陰鬱な雰囲気からは遠い。後半の、金色太子の天界遍歴にしても、「諏訪の本地」の神道集や諏方系伝本における甲賀三郎の地底遍歴に、語り口は類似した所があるが、こんでい駒に乗って天空を駆ける太子の姿には、いかにもお伽話的な明るい世界が見られる。本作は、伝本における本文の異同から見て、そう新しい成立とは思われないが、中世の本地物の中では、いわゆる御伽草子という名の方がふさわしい内容の物語である。本地物本来の唱導の物語が、草子文芸に変わってきた標本となるような作品である。

梵天国 別名橋立の本地

「梵天国」は御伽文庫本二十三篇の一つとして流布しているが、他に、次のような諸本が伝存する。(〽内は本稿で使用の略号)

- はしたて(題簽) 「江戸前期」写 奈良絵本(挿絵欠) 横二冊 筑波大学図書館蔵
- 橋立の本地(題簽) 「江戸前期」写 絵巻 二軸 フォグ美術館寄託(在外奈良絵本)(影印)「室町時代物語大成第十二」所収) 〈フオグ〉
- 橋たてのほん地(題簽) 存上巻 「江戸前期」写 絵巻 一軸 大英図書館蔵 〈大英〉
- ほんてんわう(内題) 「江戸前期」写 奈良絵本 横三冊 笹野堅氏旧蔵(「室町時代物語集第二」所収) 〈笹野〉
- 「梵天国」(仮題) 「江戸中期」写本 横一冊 国会図書館蔵 〈国会〉
- ほん天こく(題簽) 「江戸前期」写本 二軸 天理図書館蔵
- 蔵 (「室町時代物語集第二」「室町時代物語大成第十二」所収)

○ほんてん〔国〕〔内題〕^{有欠}〔寛永〕刊 古活字版 大一冊
慶應義塾図書館蔵〔影印室町物語集成第一輯〕所収

○ぼんてん国〔内題〕^{三卷(存上卷)}〔慶安承応〕刊 絵入 半

一冊 赤木文庫旧蔵〔室町時代物語集第二〕解題掲載

○ほんてん国〔題簽〕 御伽文庫版 横一冊

以上の諸本を、本文によって類別すると、次のようになる。

A類 (イ) 〈筑波〉

(ロ) 〈フオグ〉

(ハ) 〈大英〉

(ニ) 〈笹野〉

B類 第一種 〈古活〉

第二種 〈刊〉

〈伽〉

〈国会〉

C類 〈天理〉

〈天理〉

〈伽〉

〈刊〉

〈古活〉

A類の四本は、本文・画図ともに明らかに同系である。画図

の数では〈笹野〉が最も多く、全部で二十図(うち一図は見開き二頁分)ある。〈フオグ〉は十八図で、〈笹野〉の第十図と第十九図に当る図がない。〈大英〉は上巻のみで九図あり、〈笹野〉〈フオグ〉と同じである。〈筑波〉は挿絵がすべて切取られているが、その跡を数えると十六図で、〈笹野〉の第九・十八・十九・二十の四図が無い。このように、画図の数にはやや異同が見られるが、本文中の挿入箇所は、すべて合致している。これによっても、四本は同じ絵巻か奈良絵本から転写を経たものであることが推測される。本文もまた、四本ほぼ同文であるが、〈筑波〉の本文を基本として、他本の主な相違箇所を挙げれば、次のごとくである。

(例1)

〈筑波〉^A むかし、しゆんわてんわうの御とき、五てうのさた
いしんたかふちとて、^B ようかんことに、さいかくいみしきの
みならず、四はうに四万のくらをたて、なにはにつけて、と
ほしき事おはします、されとも、人けんのおもひつきせぬ
ならひとて、いそちにあまらせ給ふまで、一人のけうしおは
します、つくくあんし給ふに、われさきの世に、^C いか

るつみをつくりてか、けんさいに、こといふことのなかるら
ん、七八十のよはひをたもつとも、つゐにとゞまるへき世に
あらず、なからんあとをも、たれかとふらふへき、いにしへ
いまにいたるまで、かみほどけに申事かなへはこそ、さるた
めしもあるらんとて、きよみつにまいり、一七日こもり、五
たいをちにつけて、さんせん三百三十三のらいはいをたて
まつりて、一人のけうしを、なんしにても女しにてもたひ候
へとて、色くくのくはんをそたてられける、もし此くはんし
やうしゆせは、はなの御ちやうたい、こかねとしろかねにて
三十三めんつゝ、まい月に三ねんかけて、まいらすへし、ま
ひ月まんとうを、三ねんともしてまいらせん、にしきの御ち
やう七えつゝ、三ねんかけてまいらすへし、百人のそうをあ
つめて、ほつけ三まいのふたんきやうを、みとせよませてま
いらすへし、こんていのくはんをんきやう、三せん三百三十
三くはん、かゝせてまいらすへし、なんとの色くくのくはん
をそたてられける

A 〈笹野〉ナシ

B 〈フオグ〉ようかんことにひれいに 〈大英〉ようかんひれ
いにことに 〈笹野〉ようかんひれいに

C 〈笹野〉いかなるつみをかつくりけん、子といふ物のなか
るらし

D 〈フオグ〉百年の 〈大英〉たとひもゝとせの

E 〈フオグ〉まいらすへし

F 〈大英〉三とせよませて、御経三千三百卅三卷

G 〈フオグ〉かゝせてまいらすへしと、かやうにいろくの
〈大英〉かゝせてまいらすへしと、色くくの

(例2)

〈筑波〉そのゝちほとなく、きたのまんところは、たゝなら
すなり給ふ、ほとなくわかきみ一人いてき給ふ、御なをはた
まわか殿とそ申ける、日々にせいしんしたまひて、ちゝの大
しんとの、一ときも御身をはなさす、かしつき給ふ、五さい
と申とき、大りへ御さんたいありけるに、くそくしたてまつ
り給ふなり、ていわうきこしめして、いまたれいもんなき事
なり、七さいのわらへてんしやうといふ事あれとも、五さい
のせうてんはめつらしきなり、さりながら、たかふちかこの
事なれば、てうあひにおほしめしける

A 〈笹野〉やうく月日もまんしければ、わかきみ一人

B 〈笹野〉御さんたいあり

C 〈フオグ〉君も寵愛し給ひける 〈大英〉〈笹野〉君もてう
あひにおほしめしける

(例 3)

〈筑波〉みなみのゑんにたちいて、あふきをほとくとた
ゞき、なんたりうわう、はつなんたりうわう、^Aあなはたつた
りうわう、うはつらりうわう、とそめされける、くか一てん
なかわき、すいてんはうるほすと、申つたへて候そかし、八
りうわうのいきほひなれば、申もなかくおろか也

A 〈フオグ〉〈大英〉ナシ

(例 4)

〈筑波〉ひめきみの給ふやう、日ほんあしはらく、たうし
んこくと申て、心かけんしんならすして、こゝにさりてかし
こへゆき、あまたの人にちきりをむすふ、^Aてんのならひにて、
けんしんしくんにつかへす、ていちよりやうふにまみえすと
て、一人にはたへをふるれば、又ことちきりはなさず、たと
ひあひみねとも、それとなつけをきたれば、もしちかふこと
あれとも、そのまゝに、^Bおつとも女も、一しやうふほんなり、
まして、かやうにたてまつり候つるに、まいれとおほせある、
うたてのちうなこん殿や

A 〈フオグ〉〈大英〉てんちくの

B 〈笹野〉なれたてまつり候つるに

(例 5)

〈筑波〉あしけむま、つきけむま、かすけむま、三ひきのむ
まあり、そのなかにも、あしけむま、ことにいたをはさみた
ることくにやせたり、此あしけむまをひきてかへりたまふ、
ひめきみ御らんして、まくさなくてはいかゝあるへきと、^Aの
たまへは、ちうなこん、いかなるくさかひいるへきと、申さ
せ給へは、いつもかねか卍りやういるへしと、おほせられけ
り、やすきほとのことなりとて、^Bきてのくらをあけて御らん
すれば、^Cいつもかねこそおほかりけれ、三十りやうとりいた
し、このむまにかはせ給ひけり、そのうち、きよみつのたき
より、水をくみよせて、三石はかりかはせ給ふ、くさくい、
みつのみて、^Dゆんてめてにころひをうちて、身ふるひしてた
ちたれ

A 〈笹野〉ナシ

B 〈フオグ〉〈大英〉〈笹野〉きたのくら

C 〈大英〉きん銀あまたあり

D 〈笹野〉身ふるひしてたちたれば、しまのことくになり

けり

(例6)

〔筑波〕 さて、ほんてんわうの大ききは、いつくそとたつね給へは、これなるみちを、みなみへゆきて御らんせよ、すなはちたいりなるへしと申けり、うれしくおもひ、ゆき給ふに、けんくへいくとして、^Aの^Aにても山にてもさらになし、かきりもなくほとりもなし、したいくにいさこの色、ひとへにこかねのいろなり、しろかねのもんをたて、こかねのとひらをたて、こかねのいさこ、あつさ一ちやうはかりにしきみり、七ほうしやうこん、すへてこくらくせかひと、をとにきしにかはらす、あゆみいりて御らんするに、たまのきはし、^Bたまの^Bうてなのすたれを^Cかけ、^Cありかたくこそみえにけり、やゝありて、三十はかりなる、やうらくたれたる、てんにん一人きたつて、みなみへゆひをさし^Dければ、^Dめくれといふとおほしめして、みなみへめぐりて御らんするに、日ほんの大ききは、ししんでんなどおほしきところに、七しやくはかりなる、るりのはしら二三ほんたち、^Eくは^Eんでん也、こかねの御さのうへに、たまのゆかあり

A 〔大英〕 野とも山ともさらにわきまへす

B 〔笹野〕 たまのすたれをかけた

C 〔笹野〕 ナシ

D 〔フオグ〕 南のかたへめくれといふと、おほしめして、めぐりて御らんするに 〔大英〕 中納言殿こゝろえて、みなみへめぐりて御らんするに

E 〔大英〕 ナシ

(例7)

〔筑波〕 廿四五なる天女、こかねのおしきに、^Aるりの^Aてうしひさ^Aけを、もちていて、うちをきて、ものもいはてかへりけり、ちうなこん、心におほしめすやうは、^Bてんの^Bならひには、かゝるくい物、さけを、のめといふはうなし、ほしきまゝにのむときしものと、おほしめし、なめて御らんするに、かうはしく、かんろのあちはひあり、さかつきにて、さしくみく、^C四つ^C五つ^Cのみ、^Dうち^Dを^Dき^D給^Dふ、そのうち、^E廿四五^Eのてん女、^Eるりの^Eこきに、^Fなか^Fさ^F一^Fし^Fやく^Fある^Fこめの、^Eしろく^Eうつくし^Eき^Eめ^Eしを、^Fそな^Fへ^Fけり、^Eは^Eし^Eと^Eり^Eあ^Eけて、^Eま^Eいら^Eんとすると^Fころに、^Fそな^Fは^Fる^Fま^Fを、^Fき^Fつ^Fと^F御^Fらん^Fするに、^Fか^Fひ^Fこつ^Fの^Fこ^Fと^Fく^Fなる^Fもの^Fあたり

A 〔フオグ〕 〔大英〕 〔笹野〕 るりのさかつきをすへて、しろ

かねのてうし

B へフオグへ大英てんしのならひには

C 大英るりのうつはものに

D 大英なかき一尺はかりなるよねの

E 大英くはんとするところに

F へフオグそなはるたまを 大英 笹野そはなるまを

(例8)

筑波 ちうなこん、^A此ところはいつくと申と、とひたまへ

は、^Bらせんこくにて候へ、御ぬしははらもんわうと申候か、

一とせほんてんわうへおはしまして、ひめきみをうはひ申て、

一のきさきはずへたてまつらんとて、御かうなるを、四わう

てんわうのからめとりて、くろかねのろうにこめてをかれし

か、^C此大わうへそなはるよねをふくして、しんりきをたちま

ちゑて、ろうをやふりて、かのひめきみのあしはらくにお

はしますをうはひとりて、一のきさきにあかめかしつき給ふ

A 笹野御しよはいつくと申と

B へフオグ 笹野これこそ、らせんこくにて候へ

C へフオグ 此大わうへすなはちよねをふくして、しんりき

をたちまちえて、笹野ときおりしも、あしはらくのちう

なこんといふ人へ、此大わうのそなはるよねをそなへけり、

そのとき、ちうなこん、此はらもんのろうにあるを、ふひん

におほしめして、此めしをすこしあたへられければ、たちま

ち大しんりきをゑて

(例9)

筑波 たゝくそくしておち給へ、^A三せん里とふくるまもあ

り、^B二せん里とふくるまもあり、それにめされよ、三せん里

とふくるまは、はらもんかのりてゆきぬ、^C二せん里とふくる

まにめされよとて、くるまよせに、きさきとちうなこん殿、

のりたまひけるか、ひきやうしさいのくるまとは申せとも、

はらもんわうのくるまなれは、ぬしの心やはちけん、さらに

とふ事なかりけり、二せん里とひてこそ、はたらくにてもあ

るへけれ、^Dいまた二せん里さへすきざるに、なにとてとはぬ

そと、^Eおほせありければ、そのときにとひけり、かゝりける

所に、^Eさらによとて、せいたかく色あかく、かみはやしほの

ことくなる女あり、人はぬれともまとろます

A へフオグ ナシ

B へフオグ 笹野 ナシ

C へフオグ 笹野 二千里とぶ車あり、それにめされよとて

D 〈フオグ〉おほせありける所に

E 〈笹野〉はきら女とて

(例10)

〈筑波〉 さても二人の人くは、わにのくちをのかれきたつて、ゆめにみちゆく心ちしてゐ給ふに、ほんてんわう、これを御らんして、ゆめうつゝともわきまへす、御よろこひなされし事かきりなし、ゆめうつゝともさらにおほしめしわけす、さてもひめにてありけるか、いかにしてこれまてきたらん、こんしやうにては、たいめんかなひかたきとおもひしに、うれしく候とて、御そてにすかり給ふ

A 〈フオグ〉御よろこひかきりなし 〈笹野〉御よろこひはかきりなし

B 〈フオグ〉ナシ 〈笹野〉ゆめともさらにおほしめしわけす
C 〈フオグ〉さてくひめは

右のほかにも、語句の末の助詞・助動詞などにおける小異は少なくないが、比較的大きな相違は以上のごとくである。これを通観して、まず一本だけの異文個所を数えると、

〈筑波〉(例5) B (例7) A F (例8) B (例10) A B
〈フオグ〉(例1) E (例2) C (例7) F (例9) D

(例10) C

〈大英〉(例1) F (例5) C (例6) A D E (例7) C D

E

〈笹野〉(例1) A C (例2) A B (例4) B (例5) A D

(例6) B C (例8) A C (例9) E

となる。右はおよその目安に過ぎないが、数量的には〈笹野〉が際立って多い。その内容を見ても、(例1) C、(例2) A、(例5) D、(例6) C、(例8) C、のように、顕著な異文を多く含んでいる。そして、どれも他本と較べると、その部分の叙述としては〈笹野〉の文の方が良いように思われる。(例8) Cの個所などは、とくにそう言えるであろう。また(例5) D

では、中納言が天空へ昇る馬について、〈笹野〉だけに「しまのことくになりけり」という一句が加わっている。「しま」は紫磨であろう。その前に、いづも金を三十両馬に喰わせたところから、紫磨金の色になったと付け加えたのではなからうか。なお、B類の版本系にも、紫磨のごとくになったという文が入っているので、そちらとの関係も考えねばならないが、A類諸本の中にあつては、〈笹野〉のこつという異文個所は、独自の改訂増補であつたといつてよいのではないかと思われる。

一方、独自の異文個所が最も少ないのは〈筑波〉である。上記の六個所のうち、(例5) B、(例7) A F、(例8) Bの四個所は、単純な誤写や脱字であって、意図的な改変ではない。

(例10) Bは、すぐ前にも「ゆめうつともわきまへず」という同じ意味の文があって重複している。しかし〈笹野〉にも、「うつ」の一語だけを欠く形で、やはりBに当る句が入っているので、むしろB全体の無い〈フォグ〉の本文の方が新しいのであろう。

次に、四本の間で目につくのは、〈筑波〉と〈笹野〉、〈フォグ〉と〈大英〉の、それぞれ二本の合致している個所が、

(例1) D G、(例3) A、(例4) A、(例7) B

のように見られることである。とくに(例4) A、(例7) Bのごとく、〈フォグ〉と〈大英〉が同じ誤りを犯していることは、この二本が親近な関係にあることを示している。一方、〈大英〉は比較できるのが上巻だけであるのに、前記の通り独自の異文個所もかなり多い。従って、〈フォグ〉と〈大英〉は元本を同じくしながら、〈大英〉の方は独自に本文を改めた所が多かったということになろう。さらに、〈フォグ〉〈大英〉の二本には、〈笹野〉とのかかわりの見られる個所がほとんどない。(例7)

Fでは、

〈筑波〉そなはるまを 〈フォグ〉そなはるたまを

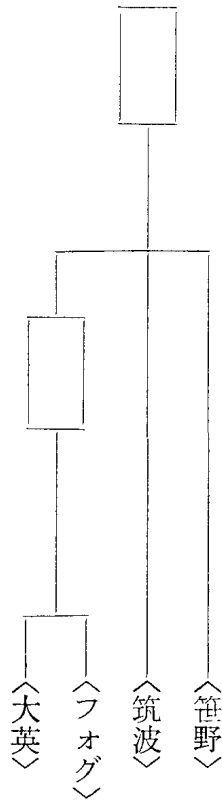
〈大英〉そなはるまを 〈笹野〉そなはるまを

とあって、〈大英〉は〈フォグ〉と異なり、〈笹野〉と一致するという異例を見せている。この個所は文意の上からいうと、「そは^側なるま^間を」が正しい。おそらく〈筑波〉は単純な誤写であり、〈フォグ〉は意味を解しかねて「そなはるたま」としたのであろう。〈大英〉と〈笹野〉が一致したのは、たまたま両本が正しい本文を伝えたということではなからうか。

最後に、四本または三本が、それぞれに異なる個所も、(例1) Bや、(例9) A B Cの一連の文に見られる。(例1) Bの場合は、〈フォグ〉あるいは〈大英〉の文が原型で、〈筑波〉は「ひれいに」を脱し、〈笹野〉は「ことに」を略したもののよう^に思われる。(例9) A B Cは、〈大英〉の欠巻部分であるので三本が対象になるが、ここでは、B Cにおいて〈フォグ〉と〈笹野〉が一致する。Aが〈フォグ〉だけに無いのは、文脈から見て誤脱と考えられるので、この個所は〈笹野〉の本文が原型なのかもしれない。〈筑波〉は〈フォグ〉〈笹野〉のようなCの部分に移りして、Bの一句を入れてしまったために、「め

されよ」の語がBCの両方に重複する結果になったのではないか。

以上を総合すると、A類四本にはそれぞれに誤脱改変があつて、たがいに補い合う関係が見られるが、全体として祖本の本文に比較的近い形を伝えるのは〈筑波〉であり、最も意識的な改変の多いのが〈笹野〉ということになる。そして〈フオグ〉〈大英〉の二本は、〈筑波〉の上位にある本から、〈笹野〉とは別の経路で、共通の元本を経て分岐した伝本なのであろう。これを図示すれば、左のごとくになる。



次にB類は、A類の写本系に対し、版本系の伝本である。最古版の古活字本（無挿絵本）は、慶應義塾図書館所蔵の一本のほか所在を聞かないが、その慶應本も全丁にわたって下半部が破欠しているために、本文の通らない所が多い。また、次の慶安承応頃の刊本（絵入）も、戦前の「室町時代物語集第二」に、

当時横山重氏の許にあった上巻だけの零本の書誌が載っているが、現在は存否不明、ほかに同版本が未だ発見されないもので、内容を知ることができない。横山氏の解題によれば、上巻に関しては、本文は御伽文庫本とあまり違っていないとある。なお、写本の中の国会図書館本は、御伽文庫本と全く同じ本文である。おそらく御伽文庫本の本文を写したものと思われる。そこで、B類に関しては、〈刊〉と〈国会〉とは対象から除外し、〈古活〉〈伽〉の二本について考察する。

〈古活〉と〈伽〉は、本文の骨格を同じくするが、ほとんど同文に近い部分の間に、所々に異文の個所を交えるほか、〈伽〉に簡略化された所が多く見られる。若干の例を挙げてみる。

(例11)

〈古活〉

〈伽〉

そののちけかふありて、ほ	其のち下向ありて。ほどな
となくきた□□たくはいに	くきたの御かた。くはいに
んあり、わかきみ一人うみ	ん有。わかきみ一人うみ給
たまふ、やか□□ま若殿と	ひ。やがて玉若殿とて、よ
て、よろこひたまふ、日に	ろこび給ふ。日にまして。
ましてせいし□したまふに	せいじんし給ふにつけて。

つけて、ひかるやうにそお
はしける、□□の大しん、
一ときも御身をはなさず、
かしつきた□□

ひかるやうにぞおはしける。
ちゝの大臣。一時も御身を
はなさず、かしづき給ふ。

□さいと申とき、大りへ御

二さいと申とき。だいらへ

さんたひありけるにも□□
くしたまふ、てい玉きこし

参内有けるにも。くそくし
給ふ。天皇わづきこしめして。

めして、いまたれいも□□

いまたれいもなきことかな。

□とかな、七さいのはらは

七歳のわらは。てんじやう

天しやうと申事□□□□、

と申事はあれ共。二さいの

二さいの天しやうはめすら

てんじやうはめづらしき事

しきこと□□□□か子の

也。たかふぢが子のことな

事なれはとて、丸もてうほ

ればとて。四位のじじうに

う□□□□すとて、させ

なし給ひて。くきやうのぎ

うへんにそ、ぢもく有、四

へぞめされける。しやうて

位のし□□□□したまひて、

んのはじめに。しるしなく

くきやうのさへそめされ□

てはいかゞとて。たんごた

□□□□はしめには、

じま兩國を給はりける。だ

しるしなくてはいか□□□□

いじん、なのめならず御よ

□□□□りう国を給わ
るこびありて。いよくい
りける、大しん、なのめな
つきかしづきたまひけるほ
らす御よろこひあつて、い
どに
よくいつきかしつき給け
る

やうく^B五つ六つにもなり
給へは、よの人の十はかり
まへは、ことにすくれて、

にもすくれて、ちへさいか
ふえをぞふきたまひける

くをわしけり、七さいにも

な□給へは、ことにすくれ

て、ふへをそふきたまふ

右のように、A Bの二個所の文が〈伽〉には無いが、そのほかの部分は、語句の末の小異を除いては同文と言ってよい本文である。そして、A Bの文が無くても、〈伽〉の本文に不都合な所は見られない。不注意による脱文ではなく、〈伽〉が意図的に省略したものと考えてよいであろう。

(例12)

〈古活〉

(二) てんわうよりのせんしに^(ママ)

〈伽〉

てんわうよりのせんじには。

は、なんちかふさい、七日
大りへまいらせよ、それが
なわすは、□れうひんと、
くしやくのとりをめしよせ、
七日大り□□まわせてみせ
よ、丸かこいの心をなくさ
めん、それ□□はずは、日
本国には、かなふましきよ
し、おほせくた□□けり、
かしこまつて候とて、はれ
く御やとへかへ□□ける、
ひめきみにあひ給ひて、し^B
かくの事おこ□□んに
かふむりて候らへと、申さ
せたまへは、心く□□くな^C
おほしめしそ、身つからか
ちの大りのいけ□□候へ
は、よびよせてまはせ候は
んする

なんちがふさい。七日だい
りへまいらせよ。それがか
なはずは。かれうびんと。
くじやくのとりをめしよせ
て。七日だいにてまはせ
てみせよ。まるが心をなく
さめん。それにもかなはず
は。日本国には。かなふま^A
じきとの、せんじなり。う
けたまはると申。急ぎやか
たへかへられける。姫君を
ちかづけ。此由かくと、か^B
たらせ給へば。それこそ、
みづからが父の。だいに
いか程も候ぞ。よびよせて
まはせ候はんとて。

(二)
さりなから、□□でんのと
りなれば、わつかのしやう
こくは、せはく□□かなふ
ましきと申へし、たましひ
はかりよひく□□て、まは
すへし、物見五つの御たか^イ
ら物、五とくのにしにしき^(ママ)
入へしと、申されければ、
やすきほどの事とて、五と
くのにしきを、あかちとあ
おちと、二たんとり出じ、
ひめきみにたてまつりたま
ふ、ごとくのにしきにて、
かれうひんとくしやくのと
りを、三しやくにぬい、こ
かねしろかねのはこ二つに
是をいれて
(三)
みなみをてのゑんに出て、
かれうひんの御こへにて、

みなみおもてに出て。かれ
うびんの御こゑにて。ぼん

ほんてんこくのとりとそめ
 されける、そのうちは、^Dは
 このふたをあけて御らんす
 れは、二つのとり、はねつ
 くりおそしける、はや大
 りへもたせて参り給へとあ
 れは、中しやうははうのく
 るまにのりつゝ、大りへま
 いられける
^(四)
 大りには、いまたきこしめ
 しおよはれぬ事なれば、あ
 にかけるかたちをこそ御ら
 んしけれ、まさしく□□き
 のあるへし、やかてこゑ
 くにいさみ給ふ、く□□
 はく、くきやう、天上人、
 さらに物ものたまわす、さ
 □□給ふ、しゝいてんの
 みなみのゆかにて、はこの

でんこくの鳥とぞめされけ
 る。せつなが間に参りける。
 姫君なのために思召。中将殿
 に奉れば。みかどへつれて
 さんだい有。

御門えいらんましゝて。

ふ□□□らき、二つのとり
 をとりいたしけり
^(五)
 ここのたとへ□□そ、かれ
 うひんのこととは申つたへ
 候へ、をもし□くさへつり
^E
 て、くしやくとかれうひん
 と二つの□□みたれてま
 ふほとに、ものによくく
 たとふ□□、□のこくらく
 の七ほうしやうとのみいけ
 かと、ほむ□□のねふりを
 さまし、をのくかんるい
 をなかけて□□むしける、
^F
 七日と申には、もとのほこ
 にそおさめける
 ここでは、C Eのように(例11)と同じ小さな省略が(伽)に
 あるほかに、A Bのように表現を少しく変えている箇所も見ら
 れる。さらに(古活)の第二段に当る一節が(伽)に全く欠け、
 それに関連して、第三段から第四段にわたって、Dの省略をは

はじめ、本文全体の改変、簡略化が行われている。第五段になると、やはり前段に関連するFの省略のほかは、再び同文の本文に戻っているが、この第二・三・四段の部分は、叙述内容及び大きな改変である。〈古活〉では、迦陵頻と孔雀を五徳の錦で作りに出し、それに魂を入れたとあるのを、〈伽〉は、直接梵天国から本物を呼び下したとしている。

(例13)

〈古活〉

〈伽〉

(二) はしめのあしけ馬、いまゝ
てはありともをほへさりけ
るか、参りていはひけり、
なをりすへもたのもしくて、
うちのりたまふ、はしめ^Aの
ことく、りやうかんをつよ
くふさきたまふに、またこ
くうにあかり、わかちやう
のみちならば、十里はかり
ゆくほとゝをほしくて、ろ
くちにむまはとひつきぬ、

はじめのこま、今まではあ
りともおぼえざりけるが。
まいりていはひける。猶ゆ
くすゑはたのもしくて。う
ちのりたまふ。やゝありて。
ろく地にこまはとひつきぬ。
御めをひらき御らんずれば。
花の都^B。五条のやかたにつ
き給ふ。

御めをひらき御らんずれば、
目ほん花の都、^B五てうのは
し、ひんかしのつめにそつ
きたり、^Cむまはあたこへあ
かりけり
(二) ちうなこんは、五てうのあ
たりにて、ことの□うおそ
とひたまふ、わらは三人い
たりけるか、中□□こさか
しきはらんへ、すゝみいて
申けるは、み□□には此ほ
と、もつてのほかにはさく
事候、なに□□候やらんと
とひ給ふは、^D五てうのちう
なごん殿、□□なけきある
やらんと、天かのさはきに
て候、しらせ□□ぬかとそ
申ける、まことなりけるよ
とかなしく□□が御しよへ

もをはしまさず

(三) すぐに大りへさんた□□り

ければ、めんほくなきあは

れき、一かたならすを□□

めして、御たいめんさへな

かりける、ほんてんわふの

□じひつの御はんをまひら

せければ、ふしきさよとて、

なひしやうれうのくらしいに

おさめられけり

すぐに内裏へさんだいあり、

ぼんでんわうの自筆の判を

まいらせければ、ふしきさ

よとて、ないしやうれうの

くらのにおさめられけり。

こども、ACDの文が〈伽〉では省略されているほかに、〈古

活〉の第二段に当る一節が〈伽〉には無い。〈古活〉では、第

一段末のBで、梵天国から帰った中納言は、五条橋の東詰に着

き、付近の童から我が館に異変のあったことを聞くが、ともか

く内裏へ参内して、梵天王から授かった自筆の判を献上したと

あるのを、〈伽〉は、馬は中納言の館に直接飛び着いたが、そ

のまますぐに参内したとしている。この後、〈古活〉は我が館

に帰り、姫君の奪われた跡を見て悲しむのであるが、その所

は〈伽〉も同じ叙述である。そこで〈伽〉では、はじめにも館

に着きながら、気にかかっていたはずの姫君のことは放っておいて参内したというような、不自然な運びになっている。これは、〈伽〉が〈古活〉の第二段を省くために、Bの文を不注意に改変した結果であろう。

以上の三例でほぼ明らかのように、〈伽〉は〈古活〉の本文を継承しながら、適宜に簡略化を加えた本と言えるが、さらに、このB類二本の相違個所を、A類諸本の本文と比較すると、いっそう明白となる。前掲三例における〈古活〉と〈伽〉の相違個所に相当するA類の本文を次に掲げる。(A類本としては〈筑波〉を使用し、必要に応じて他本の校異を注記する。)

(例11)

A さりなから、たかふちかこの事なれば、てうあひにおほしめしける、すなはち、ちもくをはしめよとて、させうへんちもくあり、四ゐのしゝうになしたてまつりて

B やうく六つ七つにもなり給ふ、よの人にこえて、さいかくことにおはしけり

(例12)

A 日ほんごくには、かなふましきよし、せんしをくたされける、ちうしやう、かしこまつて候とて

B ひめきみにあひたてまつり、かくのごとくのせんしをか
うふりたるよし、申されければ

C ひめ君、なにをかつよく、心くるしくおほしめし候そ

第二段 さりなから、てんのとりなれば、わつかのせうこく
は、せはくしてかなふまし、たましるはかりをよひくたし、
みせんするか、^イかものみやのたから物、五とくのにしきかい
るへしと、おほせありければ、やすきほどの事とて、五とく
のにしきを、あをちとあかちと、五たんめしよせて、ひめき
みにたてまつる、五とくのにしきにて、かれうひんとくしや
くと、二の鳥のかたちを三しやくにつくりて、こかねとしろ
かねと、二のはこにいれて

第三段 みなみおもてのゑんにたちいて、かれうひんの御
こゑにて、ほんてんこくのかれうひん、くしやくのとりとて、
めされけり、そのうち、このはこのふたをあけて御らんする
に、ふたつのとり、はつくるひをしけるを、はやたいりへも
たせてまいりたまへと、おほせけり、ちうしやう、^ロ八ようの
くるまにのり、大りへまいりたまふ

第四段 たいりには、いまたきこしめしもをよはれず、ゑに
かけるかたちはかりこそ御らんすれ、かゝるふしきの事なし

とて、てんわうも、きさきをはしめたてまつり、くはんはく、
くきやう、てんしやう人、さゝめきつれてまいり給ふ、しゝ
んでんの御ゆかにて、はこのふたをひらくなり、二つのとり
たちいて、あそひけり
E くしやくとふたつのとり
F 七日と申に、もどのはこにおさめける

(例13)

A はしめのごとく、りやうかんをつよくふさき給ふ、こく
うへあかり、わかつてうならば、十里ほどとおほしくて、ろく
ちにむまつきにけり

B 五てうのひかしのはしのつめにそつきにけり

C むまはあたこのたけにそのほりけり

第二段 ちうなこんは、五てうにいらせ給ひけり、わらんへ
とも二三人あそひけるか、中にもこさかしきもの、すゝみい
て、申やう、みやこはもつてのほかのさはきにてさふらふそ
や、何事にてあるととひ給へは、^ハ五てうのちうなこん殿うせ
給ひて、ほとなくこくわうまで、御心なやませ給ふ、てんに
んも、なに物かとりつらん、くろくもひとへきたつて、うち
おほひ、ゆきかたしらすうせて候、さこそちうなこん殿、御

なけきあらんと、てんかさはきにて候、いまたしらせ給ひ候
はずやと申ける、さてはまことにてありけるとて、なくく
わか御しよへもいらせたまわて、すくにたいりへ御さんたい
ありて

D あはれひとかたならすおほしめして、御たいめんもなく
以上のように、〈古活〉と〈伽〉の間に見られる相違個所のすべ
てにおいて、A類本は〈古活〉の方に近い本文を有している。
そして、傍線のイロハの三個所は、〈古活〉の本文では文意が
通じなくなっているが、A類本文によって正すことができる。
この部分の〈古活〉の本文「物見五つの御たから物」は、A類
本の「かものみや」によって考えると、「もの」を「物」に、
「みや」を「五つ」に（宮と五の草体の類似によるか）誤った所
から生じたものであろう。このような例はA類本と〈古活〉の
間に、いくつも見られる。たとえば、

〈筑波〉 かのしやうみやうこしの、はうちやうのまに、三万
六せんゆかをならへけるも、おもひしられて、いとたつと
くもありけり

〈古活〉 かのしやうめう、うし□□□□□□□□三万六
千のゆかをならへけるも、おも□□□□□□□□たつとくて

〈伽〉 かのしやうめう。うしろのはうちやうのまる(マ)。三万六
千のゆかをならへけるも。おもひしられて。いとたつとくて。

〈古活〉には破損のための欠字があるが、ここは〈伽〉と同文と
思われる。〈伽〉の「うしろの」は、〈筑波〉の「こしの」「
を」を「う」と誤った所から生じたことが明らかである。〈古活〉
がA類本の本文を誤解し、それを〈伽〉が承けついたのである。
また、梵天国の姫宮をさらった羅刹国鬼王を、A類本は「ばら
もん王」とし、〈古活〉と〈伽〉は「はくもん王」とする。こ
れもA類本の「婆羅門王」が正しく、〈古活〉〈伽〉は「く」を
「ら」と読み違えたのであろう。

A類本と〈古活〉との本文を比較すると、全篇を通じて、つ
かず離れずといった関係で叙述が運ばれているが、やや〈古活〉
が省略をしている部分もある。一例を挙げれば九七頁の(例8)
に続く本文が、〈筑波〉と〈古活〉とでは次のようになってい
る。

〈筑波〉 さてひめきみは、たはかり御らんせんとおほしめし
て、みつからはの御けうやうにて、せん日のあひた御きや
うとくしゆにて、へちに大りをたて、あさゆふとふらひて、
せん日もまんせは、ともかくもおほせにしたかはん、それま

てはいとまをたへと、おほせありければ、はらもんわうも、きさきの御すかたにめて、おほせのことくに、へちに大りをたて、あかめ申て、一日に三とつ、御ゑんまで御いてにて、きさきの御すかたを御らんしてかへり、わかところにおはします

〈古活〉 ひめきみのは、きやうやうとて、千日のきやうを、へちに大りをたて、すみをはします

〈古活〉の本文は簡略すぎて、表現不足の所があるが、これも〈筑波〉のようなA類本の本文を節略したためであろう。ちなみに〈伽〉は、この部分の〈古活〉の本文を、次のように改めている。

〈伽〉 此ころは、ひめ君の御母けうやうのためとて。へぢに(ママ)だいをたて。千日経をよみ給ふなり

なお、九五頁の(例5)Dの所の〈古活〉の文は、

〈古活〉 身ふるいしてたちたれば、しまのことくになりけり

とある。A類本の中で傍線の一句のあるのは〈笹野〉だけであるが、その他では〈古活〉が〈笹野〉と特に関係する個所が見られないので、〈古活〉がA類本のどの本と関係するかを特定

することはできない。

以上によって、B類の〈古活〉は、A類系統の写本を下敷にして本文を作ったと認められる。そして〈伽〉は、さらに〈古活〉の本文によって、それに省略と改変を加えたわけである。

ただし「梵天国」には前記の慶安承応頃の刊本があり、万治二年の書籍目録にも「ぼんでんこく」と出ている。おそらく整版本も寛永以降の早い時期に出版されていたと思われる。〈伽〉の挿絵を「室町時代物語集」に掲載されている慶安承応刊本の挿絵一図と比較すると、構図がほとんど一致している。〈伽〉は〈古活〉を直接に承けているのではなく、多分〈古活〉以後の絵入整版本に拠ったと考えるべきであろう。

最後にC類の〈天理〉は、上記のA・B類とは全く異なった本文をもつ特異な伝本である。本書は、現在は絵の無い卷子本になっているが、元は半紙本の大ききの縦形奈良絵本であったらしい。袋綴であった時の折目の跡があり、所々が散し書きになっている。挿絵を切り取って、本文だけをつなぎ合せ、卷子に仕立てたのであろう。

この本については、夙に信多純一氏が『説経正本集第三』に

収載の「梵天国の諸本」において、草子系に対する語り物系の性格をもつ伝本であることを明らかにされている。本作の語り物系に属する伝本には、次の説経や古浄瑠璃の正本がある。

(説経)

○ 梵天国 六段 写本 中一冊

赤木文庫旧蔵

本書は桑名の仏眼院に伝来した、珍しい写本の正本である。書写年代については、横山重氏が史料編纂所に鑑定を求めたところ、慶安前後とのことであった由であるが、信多氏は、本文冒頭の序詞から見て、万治頃か寛文初年頃まで年代を下げたいとの意見を出されている。

○ ぼん天こく 六段 江戸山形屋刊 中一冊

ケンブリッジ大学図書館蔵

刊記に「丑三月吉日 油町山形屋新板」とあるが、「説経正本集第三」の解題で、横山重氏は、貞享二年乙丑に鱗形屋で刊行したものが原刻本で、本書はそれを元禄十年丁丑に、挿絵を減らして複製したものと推定されている。

○ ほん天こく 六段〔宝永初〕うろこ形や孫兵衛刊 半一冊
赤木文庫旧蔵

本書は、前掲山形屋版の原刻本の構図を借りて、鳥居清信が

挿絵を描き、説経半紙本シリーズの一として刊行した本とある。

○ ぼん天こく 六段 正徳三年〔江戸〕刊 中一冊

尾崎久弥氏蔵

本書は、前掲鱗形屋版の複製であるが、少しづつ省略をしている。

以上の他に、水谷不倒氏が「絵入浄瑠璃史」の中で、元禄頃江戸版の石見天満八太夫正本を挙げているが、この本は所在を聞かない。なお、上記の山形屋刊本以下の正本も、天満八太夫系の正本と推定されている。

(古浄瑠璃)

○ 〔ほん天国〕 六段 寛文元年山本九兵衛刊 半一冊

赤木文庫旧蔵

○ ぼんでんこく 六段 延宝四年鶴屋喜右衛門刊 半一冊

筑波大学図書館蔵

右の寛文版は「古浄瑠璃正本集第五」所収。延宝版は、挿絵は寛文版によらず、構図を新にしているが、本文は寛文版とほとんど変わらない。

以上のように、説経に四本、古浄瑠璃に二本の正本が現存する。

仏眼院伝来の写本の正本は、漢字をたいへん多く交えた本文である。冒頭の一節を挙げてみると、

一、偕も其後、凡父母の孝行は、とうらい二世のめう感也、三界導師の釈尊も、因位の昔は凡夫にて、仏果をもとめん便りもなし、然るに太子十九にて、父母敬養の御為に、御出家成らせ給ひしより、終には、一乗妙典の悟を開かせ給ひ宛、三界導師と成り給ふ、是孝行のとくゆふ也

のごとくである。宛字も多く使われている。刊本の正本に拠りながら、漢字を多く使って写したものであろうか。

この写本の正本の内容を、上述のA B二類の草子系と比較すると、次のような特徴が見られる。

(1)前記の序詞につづいて、「偕、本朝の様には、丹後の国、なりあひの観世音、きれとの文珠の由来を、委しく尋るに」という一文がある。

(2)「仁王五十三世、淳和の御宇天長年中の事成ルに、若狭丹後の郡代をは、五条の中将高則と申也、御父は五条の大臣高藤と申奉ル、清水の観世音に祈ひして、さつかり給ふ御子(ママ)なれば、慈悲哀愍の御容身、三十二相を具宛、御器量世にまた類ひもなく、詩歌管絃に至迄、学残せる道もなく、上中下

に至迄、いつきかしつき奉ル」とあって、申し子の場面の詳しい叙述が無い。

(3)主人公の童にての参内、除目のことなども無い。

(4)帝は梵天国の姫宮を入内させようとし、中将が断ると、軍勢を差し向ける。中将の御内に桑原左近大輔頼家なる者が奮戦し、軍勢を追い返す。そこで帝は改めて難題を言い掛けるという運びになる。

(5)帝の難題は、伽陵頻と孔雀、鬼の娘の十郎姫、天の鳴神、梵天王の自筆の判で、草子と同じであるが、記事内容には次のような違いがある。

(イ)十郎姫の条で、宮中の人々が十郎に和歌をよませたり、琵琶・琴をひかせたりすると、何事も見事な腕を披露するので、何故に汝は中将の妻に順うのかと尋ねるといふ記事がある。

(ロ)鳴神の条で、宮中に雷が鳴り渡った時、中将が桑原頼家に命じて静めさせたとあり、雷の時「桑原」と唱えるのは此に始まるという起源説明が付いている。

(6)梵天国へ昇る龍馬を、中納言が清水観音に祈請して授かったとあり、草子系の、姫宮の教えで愛宕山から連れてきた

とするのと全く異なっている。

(7)梵天国へ昇る時、中納言と姫宮の間で、次の別れの歌を詠み交す記事がある。

今はとて、わかれ行身を、思ひしれ、しらぬ旅路の、空に
恋るゝ(中納言)

わかれ行、末も住越、里なれは、しはしめかるゝ、程そ悲
しき(姫宮)

(8)梵天国から帰った中納言は、とある寺で出家を遂げ、西国をさして下る途中、大物の浦で、清水観音の化身である翁の船に乗せられて、羅仙国に着く。海路で暴風に逢うことは草子系と同じであるが、観音が直接中納言を導くのが異なっている。

(9)羅利国で、但馬と丹後の翁姥から、中納言が親切を受けることが無い。浜辺で中納言が吹く笛の遠音を、婆羅門王が聞きつけて呼び寄せたとある。

(10)婆羅門王が隣国の王に呼ばれて出立する理由を、合戦の加勢のためとしている。

(11)羅利国を飛車に乗って遁れた中納言と姫宮が、婆羅門王に追われて危うかった時、梵天王の命を受けた韋咤天に助け

られる。草子系の、迦陵頻と孔雀が飛び来って、婆羅門の車を蹴落すことが無い。

(12)中納言が無事羅利国から日本へ帰った後、梵天王の自筆の御判を内裏へ献上する。草子系では、中納言が梵天国から帰るとすぐに御判を献上し、それから姫を尋ねて旅に出るとある。

(13)梵天王の御判を、五条の内に社を立て、父高藤を勧請して、そこに祀ったとある。

(14)羅利国で中納言に親切にした翁姥のことが無いので、老夫婦が鍵取の御前と頭れたという記事も無い。

このように写本の正本は、草子系との間で、かなり大きな相違を示している。

山形屋版以下の説経正本も、右の写本の正本の特徴をすべて備えているが、詞章には異同が多い。たとえば、(7)の中納言と姫宮との別れの歌は、次のようになっている。

めをふさく、こゝろ斗や、おもひしれ、つゆけきたびの、ひ
とりねをのみ(中納言)

たひたちし、きみを見るめの、なみだ川、ふかき思ひを、いかにせんとは(姫宮)

また(13)の条で、五条に立てた社を、西洞院の「天しのみや」とし、「さればにや、てんしとは、天のつかいとかくとかや」と言っている。

一方、古浄瑠璃正本は、大筋は説経正本に近い内容であるが、部分的には次のような相違があつて、草子系にやや近い所が見られる。

(1) 説経のような本地を説き起す形式句が無い。

(2) 申し子のことが全く無い。

(3) 梵天国の姫宮が天下つて、中将と契りを結ぶ所に、小鳥尽しの景事がある。

(4) 説経の(5)のイ)の条で、十郎姫は帝の前で歌舞を披露する。中将の妻に順う理由を尋ねることは無い。

(5) 梵天へ昇る時の、中納言と姫宮との別れの歌は次のようである。

めをとぢて、君がすがたの、みへばこそ。せめてなこりの、
こゑぞこひしき(中納言)

たび立て、君をみるめの、泪こそ、何とこたへん、事のは
もなし(姫宮)

この歌は、説経の中では、山形屋版以下の刊本の方に近い。

(6) 梵天国から帰った中納言は、姫を奪われた後の五条の館に着き、歎き悲しむが、桑原に勧められて、梵天王の自筆の判を内裏へ献上する。帝はそれを五条西洞院の天神宮に納められた。

(7) らせん国に着いた中納言が、一人の老人から親切を受ける記事がある。ただし、老人の生国を但馬や丹後とすることは記していない。

(8) 婆羅門王が隣国の王に呼ばれる理由を、師子・象・虎を退治するためとする。

(9) らせん国から逃げ出した中納言と姫宮を助けるのは、迦陵頻・孔雀・鳳凰であるが、四天王も現れて婆羅門王を奈落へ沈めたとある。

右の(6)(7)(8)(9)などは、草子系の方に通じる内容をもっていると言える。

さて、そこでC類の〈天理〉の本文であるが、草子系のAB両類と比較すると、次のような相違がある。

(1) 冒頭に「そもく、たんこのくに、きれとのもんしゆ、なりあひのくはんをんの、ゆらいをくはしくたつぬるに」という一文がある。これは説経の諸本と同様である。

(2) 帝の難題の、伽陵頻と孔雀の条で、A類諸本やB類の〈古活〉のように、二つの鳥を五徳の錦で作ったとする記事が無く、〈伽〉と同様に、梵天国から直接招き寄せたとある。説経や古浄瑠璃も同じである。

(3) 同じく難題の十郎姫の条で、参内した十郎姫が、和歌や、琵琶・琴に見事な腕を披露したので、帝が、汝は何故に中将の妻に順うのかと尋ねるといふ記事がある。これは説経の諸本独自のものである。

(4) 次の鳴神の条でも、中将の御内の侍に桑原太郎頼家といふ者が、宮中で鳴神を静めたので、雷の時には「桑原」と唱えるようになったといふ記事がある。これも説経や古浄瑠璃の諸本に通じる。

(5) 中納言が梵天国へ昇る時、姫宮と別れの歌をよみ交す。

これも説経・古浄瑠璃と同じであるが、その歌は、
めをとちて、きみかすかたの、見えされは、せめてなこり
の、こゑをきかせよ(中納言)

しはしたに、わかれとなれば、かなしくて、なにとこたへ
ん、言のはもなし(姫宮)

とあって、説経のそれとは異なり、古浄瑠璃の歌に近い。

(6) 梵天国から帰った中納言が、姫宮を尋ねて旅に出るまでの間の叙述は、前述のごとく草子系の間にも相違が見られる。A類とB類の〈古活〉では、五条の橋に着いた中納言は、童から我が家の異変を聞かされるが、そのまま内裏へ参り、梵天王自筆の判を献上し、その後、館に帰って姫宮を奪われた跡を見るのであるが、〈伽〉では、中納言は直接我が館に着きながら、すぐに参内し、再び家に戻って姫宮の無き跡を見ることになっている。〈天理〉は、五条の館の南庭に降り立ち、姫宮の消え失せた跡を見て歎き悲しんだ後、参内して自筆の判を献上すると、そのまま清水に参籠することとしている。童から異変を聞くことの無いのは〈伽〉と同じであるが、その後の順序が異なる。これは〈伽〉の叙述に不自然な所のあるのを改めたごとくにも見える。古浄瑠璃は〈天理〉と同じ叙述内容であるが、説経は、帝への自筆の判の献上を、らせん国から姫宮と共に帰国して後としている。

(7) 結びの本地を説く条が詳しい。中納言は久世戸の文殊と、姫宮は成相の観音と、らせん国の翁夫婦が鍵取の御前と、それぞれ跡を垂れたとするのは、B類諸本と同じであるが、その後には次のような一文がある。

よろつ代かけてかはらしと、ちきりふかくましますゆへ、
ひさしき世と、もんしにあらはして、くせのと申也、さ
れとも、ちきりの中たえて、一たひうきめを御らんすれば、
きれととも申也、しかれとも、きえんくちすして、二たひ
めぐりあひ給ひ、もとのことく、ふうふとなりあひ給へは、
なりあひとは申也、もんしゆしりと、ち第一のほさつ
にて、くとのものにちゑをあたへ、ひんなるものにふく
りきをそへ、ことに御身のうへにおほしめしあはせ、恋ち
にまよふともからを、みちひかんと御ちかひ、くわむせ
おんと申は、しひ第一のさつたにて、三十三身をへんし、
しゆしやうのうきめをみることを、たすけんとかひおは
します、すへてほさつのまんきやうは、上くほたい、下げ
しゆしやうと申て、なにをもつてか、しゆしやうを御身に
ちかつけ、えんをむすはしめ、まことのみちにいたらしめ、
さいとせんとおほしめす、ちかひのほとこそかたしけなけ
れ、たのむへし〜

右のような文は、説経や古浄瑠璃にもなく、〈天理〉独自の
部分である。

以上のように、A・B両類に対しての〈天理〉の特徴的な部分は、

(7)の結びの文を除いて、説経または古浄瑠璃の正本と通じて
いる。しかし、そのほかは全体として見れば、〈天理〉の本文
は、説経・古浄瑠璃よりも、草子のA・B両類の諸本の方に近
い内容である。九三頁に掲げたA類本の冒頭の一節に相当する
〈天理〉の本文は次のようである。

〈天理〉　そもく、たんこのくに、きれとのもんしゆ、なり
あひのくはんをんの、ゆらいをくはしくたつぬるに、しゆん
わ天わうの御代るとき、五てうの大しんたかふちとて、きこ
えなたかき人あり、ふつきの身にてましますは、なにはのこ
とにいたるまで、御心にまかせすといふ事なし、されとも、
御代をつき給ふへき御子ひとりもましますねは、これのみ、
あけ暮、御ねかひこそなり(ママ)にける、あるとき、ふうふもろと
もに、きよみつてらにまふて給ひ、三千三百卅三とのらいは
いあり、しゆくのほつせを参らせ、なむや大ひのくはんせ
をん、かれたる木にたにも花さくへきとの、御ちかひむなし
からすは、我々ふうふのものとも、しゆくこふつたなき身
なりとも、男子にても女子にても、子ひとりさつてたひ給
へ、此くはんしやうしゆするならば、こかねのみしやうたい、
三十三まいかけまいらすへし、花のにしきの御とちやう三十

三、是をもかけてまいらせん、三万三千三百卅三のとうみやう、とほしてまいらせん、毎日、千くはんのふもんほん、おこたりなく、三とせよませ申へしと、さま／＼のくはんをたて、七日七夜こもりゐて、かんたんをくたきていのり給ふ比較すると、叙述内容はほとんど同じで、文章だけが異なっているという体である。これに対して説経の正本は、一一〇頁に挙げた序文に続いて、

〔仏眼院本〕 偕、本朝の様には、丹後の国、なりあひの観世音、きれとの文珠の、由来を委しく尋るに、仁王五十三世、淳和の御宇、天長年中の事成ルに、若狭、丹後の郡代をは、五条の中将高則と申也、御父は五条の大臣高藤と申奉ル、大臣つねに清水の観世音に祈(ママ)ひして、さつかり給ふ御子なれば、慈悲哀愍の御容身、三十二相を具宛、御器量世にまた類ひもなく、詩歌管絃に至迄、学残せる道もなく、上中下に至迄、いつきかしつき奉ル

というふうになっている。刊本の説経正本もほぼ似た文章である。古浄瑠璃の正本の方は、

〔寛文元年版〕 それ、きよくしてすめるものは。おとろふるといへ共。ついには、天くんのあわれみをうくる。おもくし

てにござる物は。必しんりんのせめをのがれず。こゝに、じゆんな天王のみよの御時に。五条の大じんたかふじとて。くぎやう一人おはします。其御子に、四いの中将たかふさとて。たんごの国におはしますが。しいかくわんげんにくらからず。ならびなきふゑの上ずにて、其名のほまれよにたかし。扱又、家のしんかには。くわばらのよりいへ、同より竹とて。兄弟の物共が、ふかくしゆごし奉れば。何のふそくもなかりけり。のごとくで、やはり説経と同類の文である。共に、〔天理〕を含めた草子系諸本の冒頭にある、申し子の一段が省略されてしまっている。説経の方は、主人公の中将が清水観音から授かった子であることだけは語っているが、古浄瑠璃には、そのことすら記されていない。

このほか、説経や古浄瑠璃が草子系諸本と大きな相違を見せる個所として、梵天国へ昇る龍馬に関する記事や、中納言が羅刹国へ赴く時の記事があるが、いずれも〔天理〕は草子系とほぼ同じ内容である。

こうして見ると、全体としての〔天理〕は、草子系諸本の側に属する内容をもった伝本である。〔天理〕の本文には、七五調の語り物風の文章になっている部分も多いが、段分けの痕跡

は見られず、説経や古浄瑠璃の正本に拠って、それを読み物に仕立てた類の本とは思われない。「毘沙門の本地」における承応三年刊本のように、草子系に対する語り物系の伝本として、はっきり区別することはできないように思われる。すると、この〈天理〉と、説経や古浄瑠璃の正本との関係は、どのように考えたらよいか。〈天理〉が部分的に説経や古浄瑠璃の影響を受けたか、または、説経や古浄瑠璃が〈天理〉のような草子系伝本によって正本を作ったか、二通りの場合が考えられよう。

次に〈天理〉が、A B両類のどの本と関係が深いかという点について見ると、前記の〈天理〉の内容上の特徴の(2)と(6)のごとく、〈伽〉との関係が考えられる。詞章の上では、〈天理〉の本文が全体としてどの本に近いとは言いがたいが、細部には次のような個所が見出される。

〔天理〕 そのうち、こしの中よりも、十四五はかりの姫宮の
出させ給ひて、御さにうつらせ給ひしかは、あたりもかゝや
き渡ける、中将なのめにおほしめし、ひめ君に打むかひ、た
かひに見えつみえられつ、えんあうひよくのかたらひは、あ
さからすこそきこえける

この個所のA B両類の本文はかなり違っているが、相当する部

分は次のようになっている。

〔筑波〕 しゅう、こなたへの給へは、きちやうのまに、に
しきのしとねのうへにゐたまへり、この世の人とも見えざり
けり

〔古活〕 右に同

〔伽〕 しゅう、こなたへのたまへば、きやう(ママ)のまへ、にし
きのしとねのうへにゐ給へり、たがひにみえつ見えられつ、
鴛鴦ひよくのかたらひも、あさからすとぞ聞えける

傍線の部分のように、〈天理〉と〈伽〉との間のみ同文が見られる。

〔天理〕 たゝいまのこくしやこそ、らせんこくの大わう、は
らもんといふもの也、わかひめ七さいのころより、たひく
のそみたりしかとも、われつるにゆるさねは、いろくはか
りことをめくらし、ぬすみとらんとしたりしを

右の傍線の所が、A類本は「五さいと申とき」、B類の〔古活〕
は「二さいのとしよりも」とあり、〔伽〕だけが「七さいの年よ
りも」とする。

〔天理〕 ほん天わうきこしめし、そのきにてあるならば、下
すへしとのたまひて、きんさつに御はんをすへて、出させ給

ふ

A類本は「しろかねのふたに、こかねの御はんをあそはし」とあり、〈古活〉も同じであるが、〈伽〉は「きんさつに御判をあそばし」となっている。

〈天理〉 我、はうへんのちからをもつて百日にをよはんとき、かならずてんによにあはすへし、かへすくとおほせある

A類本は「百日と申さん時」、B類は〈古活〉が「千日といわんとき」、〈伽〉も「千日と申には」とあって、ここでは〈天理〉はA類本と合致する。

〈天理〉 このよし、ちよくし立ければ、うけ給はると申て、中なこんをともしひて、おうちさんたいつかまつる、みやうけんてんのひろにはにて、ふゑをふかせてきこしめし

A類本は〈天理〉と同じ「めうけんてん」であるが、B類の〈古活〉と〈伽〉は「しんけんてん」とある。

〈天理〉 おりふし、ならひのくに、きまんこくの大わうより、らせんこくへちよくしをたてけるやう、し、さう、おほくあれはみて、たみのわつらひおほければ、かりをもよほすところなり、いさもろともにみゆきなりて、両こくのせいをあはせ、かすをつくしてかりとるへし、御とうしんにおゐては、

はやくみゆきなるへしと、のたまひこされたりければ

これもA類本には、

〈筑波〉 さるほとに、ならひのくにのみかとをは、りうきうてんわうと申けり、御つかひありて、し、さうなとかおほくて、あまりに物はむあひた、たみのなけきに、御かうありて、狩し給へとそ仰けり

とあるが、B類の〈古活〉と〈伽〉は、

〈伽〉 さるほとに、ならびの国のけいしんこくのみかどは、りうきわうとぞ申ける、はくもんわうへちよくしをたてまつる、うけたまはるとて

とあって、隣国からの招請の理由を述べていない。

以上六例のうち、前三例では〈天理〉は〈伽〉のみと一致し、後三例はA類本と合致する。従って、〈天理〉が〈伽〉とのみ交渉をもつとは言えないのであるが、前三例のように、〈古活〉の本文を承けた〈伽〉が独自に改変したと見られる個所において、〈天理〉との一致があることは、両者の間に特に深い関係があったのではないかと思わせる。

上述のごとくC類とした〈天理〉は、その本文の性格に疑問の多い伝本である。A B類の草子系諸本と骨格を同じくしながら

ら、説経や古浄瑠璃正本との類似点を有する。巻頭に本地を説き起す序詞のあることや、巻末の仏菩薩の利生を説く部分の詳しい所は、本地物としての特徴を見せているが、本文は草子系諸本の中で特に古体と言えるものでもない。草子系の中では最も後出の〈伽〉系統の本を下敷にしなが、説経や古浄瑠璃系統の本文をも取り入れて成ったのではないかとの推測も可能である。

本作の物語は、部分的には「天稚御子」(七夕)「毘沙門の本地」(御曹子島渡り)などと類似した所があり、室町期の物語草子に類例の多い話を接合して、一篇に仕立てた作であろうか。説経と古浄瑠璃の正本には、梵天王の自筆の判を、帝が五条の天しの宮(古浄瑠璃は五条西洞院の天神宮)に納めたとあるが、このことについて、信多氏は「尤の雙紙」上二十四の「稀成物のしなじな」の条に、

又昔、からはしの中將とて、古来不双の美男の公家あり、あまつさへ笛の上手たり、天道につうじて、ぼんてんのあるじ、むこにとり給はんとの勅使あまくだりぬ、今の京、五条てんしの宮これ也、節分の日、あまねくまうずる宮なり

という話の出ていることを挙げ、「古浄瑠璃の正本や説経の正本は、この唐橋の中將の由来と結びつけて、梵天国の説話を増補改作して行つたものかも知れない」と言われているが、右の唐橋の中將の話そのものが「梵天国」とそっくりなのが不審である。もし、こういう話が古くあったとすると、「梵天国」の方が、この話を主要な材料にして成ったことになるが、あるいは逆であるかも知れない。

一体、「梵天国」は、丹後国の久世戸の文殊と成相の観音の本地を説く形で物語られているが、物語の内容は、この二所の本地としての必然性が稀薄のように思われる。草子系諸本では、男主人公の中納言が幼少ではじめて昇殿した時、帝から但馬・丹後の両国(C類〈天理〉は丹後一國)を給わつたとある。説経では、その辺の所が省略されているが、巻頭に「若狭丹後の郡代をは、五条の中將高則と申也、御父は、五条の大臣高藤と申奉ル」(仏眼院本。刊本には「若狭丹後の郡代をは」の一句が無い。)とあり、古浄瑠璃になると、「五条の大じんたかふじとて。くぎやう一人おはします。其御子に、四いの中將たかふさとて。たんごの国におはしますが」となっている。説経の、大臣の御子が郡代というのもおかしいが、古浄瑠璃でも、その後

は、中將は都五条の館に住んでいたことになっていて、「たんの国におはします」が宙に浮いた形で話が進んでいる。どうも草子系をはじめ、主人公を丹後国と何とか関係づけようとしたごとくに感じられる。

ただ、草子系諸本では、中納言が羅刹国に漂着した時、丹後・但馬の者という翁姥が、中納言に宿を貸して労わったとあり、その老夫婦は、後に成相寺の鍵取の御前と頭れたと述べている。鍵取というのは、寺社の御堂や本尊の厨子の鍵を預っている者であるが、実際に成相寺に「鍵取の御前」の名で祀られている神があつたのであれば、その由来について何らかの伝承があつたのかも知れない。熱田明神の撰社には、源太夫・紀太夫という神が祀られているが、この二人に関して「神道集」の「熱田大明神事」には、

熱田大明神、始テ天下下シ時、記大夫殿ハ宿ヲ借シ上リシ人也、
源太夫殿ハ雑事ヲ進ラセシ人也

とあり、文明頃の写本「熱田の神秘」には、

大みやうしんの御うしろみにてまします

と説明されている。「梵天国」の翁姥も、これと同じような役割を物語の中で負わされている所を見ると、本作が久世戸の文

殊や成相の観音にまつわる信仰上の伝承と無関係とも言えない。

しかし、本作は物語の筋が変化に富み、新奇な趣向がこらされていて、娯楽的な読み物としての色合が濃い。清水観音の申し子である主人公が、次々と起る試練をきりぬけて、妻との契りを全うするというこの物語は、本地物の通型を充分に備えているが、伝承文芸の性格の強い古い本地物にくらべると悲哀感が薄い。物語の筋の変化と、新奇な画面を見せようとする、いかにも御伽草子的な作品と言うべきであろう。伝本の上から見ても、〈天理〉だけに問題があるが、A B 両類の諸本は、上述のごとく、相互の関係をほぼ確実に系譜づけられるもので、大きく見れば本文の系統が単一である。おそらく成立もそれほど古い作品ではなく、本地物の形式を追った、御伽草子としての創作であつたと考えたい。

柳亭種彦は「還魂紙料」や「足薪翁記」の中で「梵天国」のことに触れている。

むかしの浄瑠璃に梵天国といふあり、梵天国の冊子によりて作れるもの也梵天国は御伽ざうしのうちにあ、此浄瑠璃は慶元の頃、足利の末の代にいできし書か

河内左内南無右衛門等の語り出し、が伝りて、ちかく貞享元祿の頃、虎や永閑天満八太夫なども、浄瑠璃の祝言にはか

ならず此梵天国をかたりけるとぞ今長明をうたふものゝをばりに、
菊慈童を祝言とするがごとし

そのゆゑに何にもあれ、もはや是ぎりといふことを、梵天国
をうたふといふ諺は今ありて、その浄瑠璃は絶たり（足薪翁

記卷之三）

このように、本作は早くから浄瑠璃としても盛行していたらし

いが、それも、筋の目新しさや、孔雀・鳳凰などの出てくる趣
向が、操りとしても受けたのであろう。それと共に、草子にお
ける「文正草子」のような役割を本曲が有していたと伝えてい
る。おそらく草子としての「梵天国」も、そのような祝言性の
故に、御伽文庫二十三篇の一として流布したのであろう。